

わが大学・わが学部の教育改革を語る

— 学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム —



立教大学
大学教育開発・支援センター

わが大学・わが学部の 教育改革を語る

—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム—

大学教育開発研究シリーズ
No. 4

立教大学

はじめに

現在の大学教育は、これまでになくはっきりと社会で役立つ自立型人材を養成することが要請されています。一方、学生の気質や志向は多様化の一途をたどり、従来の大学教育では十分に対応できないという認識が共有化されてきています。これらの社会的要請と学生の変化をうけて、大学が変わらざるを得ない状況となっており、各大学とも浮沈をかけて教育改革に取り組んでいます。

多くの大学は、それぞれの建学の精神に基づいた教育改革を工夫・実践し、成果を生み出しつつあります。しかし、それらの具体的な実践方法や課題については意外によく知られていないのが実情です。そこで、今回は学生の「学ぶ力」、ならびに学ぶ力のベースとなる「選ぶ力」を育むためのカリキュラム改革に注目し、特筆すべき改革を実践している当事者から具体的に語っていただき、立教大学の今後を共に考える機会とすることを目指して、本シンポジウムを企画しました。

本号をご覧いただければわかるように、シンポジストのお話は、大学教育改革を大胆に行った刺激的な内容でした。立教大学のみならず、教育改革に取り組んでいる多くの大学にとって貴重な情報を本号としてまとめることができました。お忙しい中でシンポジストをお引き受けいただいた先生方に感謝いたします。また、代表質問者の先生方、熱心に討論に参加していただいた方々にも感謝いたします。本号が、立教大学の教育改革のヒントになれば幸いです。

大学教育開発・支援センター長／理学部長
檜枝 光太郎

目 次

はじめに

第一部 シンポジウム	1
発表1：芝井 敬司氏	5
発表2：日比谷潤子氏	17
発表3：濱口 哲氏	27
第二部 パネルディスカッション	39
代表質問	39
ディスカッション	48
資 料	62
資料1：芝井 敬司氏	62
資料2：日比谷潤子氏	67
資料3：濱口 哲氏	70

わが大学・わが学部の 教育改革を語る

—学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム—

2006年12月11日（月）に行った
シンポジウムの記録

プログラム

〈第一部〉シンポジウム

シンポジスト 芝井 敬司（しばい けいじ）氏
関西大学 副学長
日比谷潤子（ひびや じゅんこ）氏
国際基督教大学 教学改革本部長
濱口 哲（はまぐち さとし）氏
新潟大学 学務担当副学長、全学教育機構副機構長
司 会 足立 寛（あだち ゆたか）氏
立教大学大学教育開発・支援センター調査役

〈第二部〉パネルディスカッション

代表質問者 前田 一男（まえだ かずお）氏
立教大学文学部教授
大野 久（おおの ひさし）氏
立教大学大学教育開発・支援センター副センター長、
学校・社会教育講座教授
司 会 菊地 進（きくち すずむ）氏
立教大学総長補佐、経済学部教授

日 時 2006年12月11日（月）18：00～20：30

場 所 立教大学池袋キャンパス 8号館8202教室

第一部 シンポジウム

足立 2006年度大学教育開発・支援センター主催シンポジウム、「わが大学・わが学部の教育改革を語る」、副題、「学生の学ぶ力・選ぶ力とカリキュラム」を開催いたします。第1部の司会をさせていただきますのは、私、当センター調査役の足立寛と申します。よろしく申し上げます。

本日は、シンポジストからのプレゼンテーション、それから本学の指定代表質問者を交えたディスカッションの2部構成で進めさせていただき予定です。20時30分までの長丁場となりますが、どうぞよろしく申し上げます。

それでは、開会に先立ちまして、当センター長の檜枝光太郎より開会のごあいさつをさせていただきます。檜枝先生、よろしく申し上げます。

檜枝 皆さん、お忙しいなかお集まりくださいまして、ありがとうございます。私たちのセンターは一昨年10月に発足して、2年強たちました。この最初の2年間は、立ち上げの第1ステージでしたが、最近、大学の総合発展計画とリンクした第2ステージになってきたかなと思っています。それは、立教大学の長期的な総合発展計画の基本計画が総長から出されて、その中に、大学が取り組むべき第1の課題は、言うまでもなく学士課程教育の充実であるという文言が冒頭に出てくる大切な章があります。今の大橋総長を中心として、立教大学の発展のためには学士教育の改革なくしてはありえないということで、全学的にもそういう気運が高まってきているということです。私たちセンターも第2ステージとして、そういう期待に応えられるように、ますます活動を高めていかなければいけないなと思っていますところです。

私は理学部長もやっていますので、自分の学部の教育をいかに改革していくかということにいろいろ頭を悩ませています。本日は、その悩みに対していろいろな有益なお話がかがえるのではないかということで、非常に期待しております。どうぞよろしく申し上げます。

大橋総長が非常にお忙しいなかご出席いただいていますので、ごあいさつをいただければと思います。よろしく申し上げます。

大橋 総長の大橋でございます。今日はお出かけくださいましてありがとうございました。また、3人の先生方にはお忙しい時間を割いていただきまして、話をさせていただけるということで、大変感謝しております。

今、大学が非常に厳しい環境にあるということがよく言われます。それは、よく18歳人口が縮小して、学生さんの数、受験者の数が小さくなってきたということが指摘されますが、私は今、大学が抱えている課題はそういうことではなくて、このところ顕著に若い人の資質がずいぶん変わってきた。それから、もう一つは社会の状況がずいぶんと変わってきた。学生さんの資質と社会の状況。それを上手に関連づけて、結びつけて、私たちが教育をできなくなって



大橋英五総長

いるのではないかということに課題があるのではないかと思います。

私が学生、子どものころはそれこそお兄ちゃんお姉ちゃんたちに連れられて、野山を駆けめぐっていた。あるいは野球に暗くなるまで興じていました。そういうなかで子どもながらに小さい頃、若い頃から社会性を身につけて、いろいろな社会に目が開かれていた。家に帰るとお父さんお母さん、お兄ちゃんお姉ちゃんがいて、一緒にご飯を食べながら、今日あったことを話ながら、いろいろな人の社会、お父さんの社会、お母さんの社会、お兄ちゃんの社会を聞きながら育っていった。そういうことが相対的になってきた。一人でパソコンをやりながら、ゲームをやりながら、それがすべてではないですけれども、そのようにして育ってきた子どもたちが、若い人たちが大学にやって来る。

一方、社会は新しい課題がどんどん出てくる。今まで経済学、社会学、あるいは法学で整理できなかったような環境の問題。NPO・NGO、あるいは危機についてどういう説明を大学はしているか。それぞれのところで、経済学でもそうですけれども、今までの延長上で上手に説明できないような課題がどんどん出てくる。それについて、大学が研究して、それを上手に若い人たちに教育してきたか。これはなかなか厳しい問題です。私はやはり、学生さんの学力や能力が少なくなったのではないか、弱くなったのではないかと

いうことではなくて、学生さんの持っている力、持っている資質を踏まえて、きちんと教育活動を大学はできていないのではないかとすることに課題があるのではないかと考えています。

今日は立教大学の教員も含めまして、あるいは第一線で教育改革に取り組んでいただいている3人の先生をお迎えして、ゆっくりとお話をうかがいながら、今後の教育改革についての方向を考えさせていただきたいと思います。

今、大学では、教育改革に向けていろいろな調査やアンケートをして、方向性、あるいは分析がされます。それを実際に教育のなかに活かしていく。改革していく、改革を実現していかないと、自分たちはこんなことを知っている、大学はこんなことを知っていると言うだけでは、何の意味もない。ほとんど意味がない。実際に若い人たちに対する教育を変えていく。そのために議論をしていきたいと思っています。今、大学は非常に厳しい競争環境にあります。大学はきちんと教育をして初めて大学ではないかと思っておりますので、忌憚のないご意見をうかがいながら、私たちも毎日進んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

シンポジスト紹介

足立 大橋 総長、ありがとうございました。

それでは、ここで配付資料の確認をさせていただきたいと思います。一番上にコメントシートを付けております。こちらのほうは、ご所属とお名前、そして忌憚の無いご意見をお書きいただき、お帰りの際にお渡しいただければと思います。その下に、今回のシンポジウム全体のご案内と、各シンポジストの3名の先生方の配布資料がございます。何か不備等ございましたら、手を挙げていただき、係の者にお申し付けいただければと思います。

さて、今回のシンポジウムですが、副題として「学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム」というタイトルを付けさせていただきました。これは本日、先生方にご発表いただく内容が、それぞれのテーマや趣向は違っても、学生の学ぶ力、その学ぶ力のベースとなるいわゆる選ぶ力、こういったものを育てるためのカリキュラム改革であるという共通の項目、共通項があるからです。

本日はこのようなカリキュラム改革の取組について、当事者の先生方から具体的に語っていただいて、立教大学やご参加の方々の大学の今後をとともに考える機会とさせていただきたいと思います。

それではここで、シンポジストの先生方のご紹介をさせていただきたいと思います。恐縮ですが、いったん3人の先生は、壇上にお上りいただきますよう、よろしくお願いいたします。

ステージ右手のほうから、お1人目は芝井敬司先生でいらっしゃいます。芝井先生は京都大学文学部史学科をご卒業後、同大学院をご修了されました。ご専門は西洋近現代史です。関西大学では学生主任、自己点検評価委員会副委員長などを歴任され、2000年10月より文学部長として2期4年、文学部における組織改革、カリキュラム改革、入試改革、社会連携など積極的に取り組まれてこられました。2006年10月より関西大学の副学長に就任され、現在は、全学的な教育改革に取り組まれていらっしゃいます。

そのお隣は日比谷潤子先生でいらっしゃいます。日比谷先生は上智大学外国語学部フランス語学科をご卒業後、同大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程、さらにペンシルバニア大学言語学科博士課程をご修了されました。国際基督教大学では2002年から教鞭をとっておられ、日本語教育プログラム主任、語学科長を経て、現在は教学改革本部長として、来年度以降の教学改革の先頭に立って改革を進めていらっしゃいます。

それから、最後3人目は濱口哲先生でいらっしゃいます。濱口先生は東京大学理学部生物学科をご卒業、同大学院の理学系研究科をご修了されました。ご専門は動物学、発生生物学、生殖生物学で、特にメダカの生殖細胞の研究では第一人者でいらっしゃいます。教育改革関係では、2002年から新潟大学の大学教育開発研究センター長、2004年度からは学務担当副学長、全学教育機構副機構長を併任されていらっしゃいます。先生方どうぞよろしくお願いいたします。

（発表1）芝井 敬司氏

08年度問題をどう乗り切るかが課題

それでは、これから各先生にご発表をお願いしたいと思います。最初に、芝井敬司先生からのご発表です。芝井先生、どうぞよろしくお願ひいたします。

芝井 それでは、時間も限られているようですので、ご指示のとおり30分以内ということですので、6時45分をめどに少しお話をさせていただきたいと思ひます。

最初に、先ほど大橋総長先生から話がありまして、私はやはり勘所のつかまえ方といいますか、猫の首根っこの押さえ方がとてもしっかりしているなと思ひて感動いたしました。少子高齢化のなかで大学がどのように生き残るのかということは盛んに言われているわけですが、それは間違っではないのですけれども、そういう視点で大学の改革問題を論じることは、やはり本末転倒であろうと思ひます。むしろ現代の若者の資質を踏まえながら、大学はどのように彼らに対応できるのか。つまり、大学の教育力が今、問われているのではないかと思ひます。それさえわかればもういいわけですが、それではシンポジウムになりませんので、私のほうから、関西大学文学部でこれまで取り組んでまいりましたことを少し説明させていただきたいと思ひます。

最初に、お手元のレジユメに従ひまして、少しお話をさせていただきたいと思ひます。この間、関西大学文学部は継続的な改革に取り組んでまいりました（P62資料1－1）。出発点がいつなのかと言ひますと、いろいろな数え方がありまして、早い時期に求めるならば、1996年ぐらいから動いていたわけですが、ただ、大きな改革という意味で言ひますと、ちょうど私が文学部長になりました2002年10月から、2006年、この9月までの4年間に、組織改革も含めたかなり大きな改革をいたしましたので、今日はその話を中心に、少しお話をさせていただきたいと思ひます。

まず改革の前提なのですけれども、なぜこのようなことに取り組んだかと言ひますと、私どもの意識の中では、やはり2006年度問題、すなわち新課程の教育を受けた学生が大学のキャンパスに入ってくる。それに対して私たち



芝井敬司氏

はきちんと準備ができているのかというのが、私たちにとっての最初の問いかけでありました。これは教育面での問いかけです。実際、大学全入の時代と言われていまし、最近、高校の校長先生とお話ししますと、「芝井さん、2008年度問題というのを知っているか」と言われまして、何のことですか、こっそりと教えてくださいと。2008年度には、中学校から新課程を受けた子が大学に入ってくるという話をされました。「これはすごい」と校長先生はおっしゃ

っています。「2006年問題どころではない。それに対して大学の教育というのはしっかり整っていますか」と言われた。「小学校で学級崩壊を経験した人たちが大学に入ってくる。大学で学級崩壊が起こらない保証がどこにありますか」と、その校長先生はおっしゃいました。

まだそういう時期ではないわけですが、学力不足ということだけではなくて、さまざまな大学があるわけですが、先ほども総長先生がおっしゃったように、ほとんど対人コミュニケーションの基礎ができずに、単純に学力の試験だけで大学に机を並べることが、やはりそういう時代が来るということだけは、私たちも覚悟しておかなければならないと考えています。

新学部長として学部組織改革を表明

そこはちょっと置きまして、私たちはそういうことを考えながら、ここにありますように、一つの標語をつくって改革の作業に取り組んだわけです。それはここにありますように、「多彩なディシプリンと活発なプロジェクトによる新しい人文学の拠点形成」をしたい。それこそが文学部の将来の一つのイメージをかたちづくるであろうと考えたわけです。

2002年10月から私の任期が始まりまして、同時に、文学部長のほかに、部長代理、教学主任、学生主任等々、全部合わせまして7人の教員で文学部の

執行部を構成します。部長と部長の手先と言うと怒られるのですけれども、仲間が6人いまして、週1回、多いときには3回ぐらい集まっていました。最低でも週1回、半日はずっと会議をし、議論をし、作業をするという場を設けました。私どもの学部では、10年前から学部長になった最初の教授会のときに、新学部長が所信表明をするという慣例がございます。10年前の8月、当時選ばれました部長から、「おまえが部長代理をやってくれ」と言われました。調子に乗りまして三つの条件を出しました。その一つの条件は、ぜひ所信表明をやってほしい。それがだめなら私は執行部に入りませんと言いました。大変失礼な話なのですが、あとの二つの条件は今日の話とは直接関係ないのでやめます。

それから実は10年間、私どもの学部では、学部長になりましたら必ず、任期の2年間何をするのかということについて教授会の場で文書をもって、一定の時間をかけて、20分くらいですね、所信を表明するという慣例としてやっております。ですから、自業自得なのですが私の番が回ってきたわけです。第一期はそこにある三つのこととお約束すると所信表明で申し上げました。その一つが、学部組織の改革。これは次に載せました8つの学科がありまして、特に複数の学科でできている学部の先生方のご存じだと思うのですが、それぞれが「タコツボ」になっています。まったく交流がない。まったくというのは言い過ぎとしても、あまり交流がない。学生がよその学科の授業に行くのを先生が止めるという時代でございました。よその授業を見るな、自分の学科だけ見てほしいということでございます。当然、学科がカリキュラムを決め、それから学科が人事も決めます。それぞれの学科で大事なものは人事ポストですから、一つも渡すわけにはいかない。これはマイナスなのですが、人事権を渡せと言うなら学部長をやめろというような対応になります。これがいわゆる見事に保守的で伝統的で、これを何とかしないといけないというのが出発点であります。その改革は当然します、これが一番のテーマです。

後任補充をやめ選考プロセスを透明化

二つ目は、新規採用人事の改革をしますということをお約束しました。それまでは旧態依然の採用を新規の教員人事においてやっておりましたので、

三つ原則を出しまして、それでやってください、それでやりましょうということを言いました。一つは当然、全面公募、全部公募にしますと。二つ目は、これはあまりまだやっておられないと思うのですが、後任補充人事をしません、ということを提案しました。正確に言うと、後任補充人事という名目では人事を行いません、ということを提案しました。これは、さまざまな改革がなされても、なかなか大学がまじめに取り組んでいない問題です。私はまじめに、本格的に改革をするのだったら、ここから手を打っていかないとけない。後任補充人事をやらない。少なくともそういう名目では人事をやらない。これが二つ目です。つまり、A分野のA先生がお辞めになったら、自動的に後任として同じ分野のB先生を採りましょうという話をやめてくださいということです。

3番目が、選考プロセスを透明化するという事です。いわゆる複数の人間で審査をしたり、その評価表をつくったり、あるいは教授会にそれを全部出して、みんなで合議のうでで決定しましょうという、プロセスの透明化ということです。

最後が、大学と社会との連携をぜひ進めたいということで、いくつかの提案をさせてもらいました。

ちなみに2004年の10月からやはり同じように所信表明を求められまして、まずこれまで進めてきた教育改革を継続します、そこに新しい先生を複数当てていきます、ということをお約束しました。二つ目は、一期の3番目と同じなのですが、社会連携をさらに推進します。それから三つ目は、研究に力を入れていきますと。その結果、今日の話に直接関係しませんので少しだけ申し上げますと、私どもの文学部は、科研費の採択金額で言いますと現在年間1億円です。理工系から見るとそんなに少ないのかという話ですが、私立大学の文学部としてはおそらくかなり大きな額です。

それと、私立大学の学術研究高度化推進事業という名称の研究補助金がございます。文学部に関連してその中のオープンリサーチが1件、学術フロンティアが2件、あわせて3件が2005年に採択されました。5年間の総経費が19億3千8百万円。そのうちで文部科学省からの補助が9億8千8百万円というかなり大きな金額です。これもそこで表明をして、かなりグルーピングを工夫しながら申請まで持ち込みました。

上位年次適用で一挙に組織を変革

それで、今日のテーマの初年次教育のことでございます。先ほど申し上げましたように、学部組織を変えたい。学科がほぼ、そのままであるならば、文学部の発展はないと考えておりました。当時8学科ございました。英、国、哲、仏、独、史地、中、教と呼んでおります。そこに体育学教室と図書館・教養教室がありまして、8学科2教室という体制でございました。

先ほど申し上げましたように学科というのは大変固い組織です。学生定員が決まっています。主要な科目についても全部規制を受けています。それから、教員の数もかなりのレベルで決まった組織です。例えば新しい分野が人文科学領域で出てきたので、新しい学科をつくりたいと思っても、いったいどこからポストを持ってくるのか、いったいどこから学生定員を持ってくるのか。こんな時代ですので、新しくポストや定員を増やすことはなかなか難しい。当時のことですから余計に難しい状況でしたので、このままでは新しい展開はほとんどできないだろうと思ひまして、そこにありますように、「総合人文学科という名前で1学科にしませんか」という提案をしました。

これはかなり揉めまして、約3カ月、教授会に出てから3カ月ですね。揉みに揉んで、途中でいろいろな妥協案が出たのですが、全部拒否をしまして、最後1学科10専修という形になりました。8つの学科はそのままほぼ横に動きまして、そこに二つの新しい専修、具体的には、身体運動文化専修という専修と、インターディパートメントという名前の専修をつくりました。これはただ単に組織の移行ではないというところがありまして、一つは、上位年次適用したこと。つまり、新しい専修名称を上位年次の2年、3年、4年まで全部適用しました。だから、2004年度には文学部がガラッと変わりました。これは手続き上ややこしかった。

ただ、文科省との関係ではそんなにややこしくはありません。内部的にはいろんなところがややこしい。こうしたことは、ほかではあまりやっておりません。私たちは学生全員に文書をつくりまして郵送しました。学生の親御さんにも全員、文書をつくりまして郵送しました。何回か説明会を開きまして、どうか認めてほしい、と言いました。なぜそんなことをしたかという、簡単に言いますとこうしないと先生の意識が4年間変わらないのです。新しく1学科にしたところで、このまま年次ごとに移行していきますと、1年生

はたしかに1学科になっていますが、2年生、3年生、4年生は旧の8学科のままです。それでは先生の意識が変わらないですね。これは大変困る。この激動の時代に何年も意識が変わらない。昔の8学科の名前でずっと学生を呼び続けるというのはもうやめてほしいと言ひまして、かなりしんどい作業だったのですが、一挙に変えました。

もう一ついいところがありまして、一挙に変えますと、次の改革は割合早く着手できる。一挙に変えないと、年次ごとに変えますと、新1年次の適用になりますので、下手に次の改革をしてしまうと、4年間に3種類ぐらいの学生が混ざるのですね。それはちょっと実際できませんので、いったん新しい制度にしますと、4年間はいらわない、動かさない。どこの大学でもそうだと思います。それではちょっと間に合わないだろうと思ひまして、あえて1学科10専修制度を上位年次適用しました。

四つの方向性で新専修を提案

それからもう一つは、2年間のうちに必ず新たな専修をつくりますということと同時に決めました。新しい専修を立てます。どんな専修ができるかは予測できないけれども、最終的に総合人文学科1学科15専修から20専修ぐらいまでは見通して、これから力をあわせて新専修を立てていきたいと思いますという提案を一緒に通しています。

新専修に関してどのように考えるかということですが、これは文書を書きまして、だいたい四つぐらいの方向で考えてみたらどうだろうという提案をしました。文学部は人文科学分野の学問領域を扱いますので、旧来は哲、史、文という大きな枠組みがあります。哲学、歴史、文学ということですが、それだけでは今後の新しい展開に対応できないということで、まず初めに文字以外の表象の世界を文化的に解釈する部分を新専修として入れ込みたい。これが一つです。それは映画であったり、図像であったり、さまざまな模様であったりしぐさであったり、そういういろいろなものがあるのですが、少なくとも文字以外の表象文化の分野を入れたい。これが一つです。

二つ目はフィールドワークに積極的に取り組むような専修を模索したい。例えば文化人類学がそうですし、そのほかにもいろいろあるわけですが、人文学の範囲で見えていくと、フィールドワークを組み込むことがすごく大事で

あると。これが二つ目です。

それから三つ目が、文学に関しては特に作品の解釈ではなくて、やはり創作や実作を入れたいというのが三つ目です。私どもは創作や実作の専門分野がございませんでしたので、ぜひ作品の解釈ではなくて作品の創作、実作を入れたいと。

四つ目は、文化の政策学的なアプローチを入れたい。つまり、文化を冷静に科学的に解析するだけではなくて、それをどう社会に応用するのかということを考えたい。

この四つの方向性を打ち出しまして、これも教授会でかなり議論がありましたが、一応、部長が言うのも分からないでもない、まあまあ分かる、こういう方向で考えたらいいのだなということで、一定の承諾をいただきました。

これがすべてうまくできているわけではないのですが、やはり四つの方向性を踏まえたかたちで、この間、私どもの文学部は大きくなってきております。

学部一括入学・2年次の専修分属制度に

それから、以前は入試に関しては完全な学科別募集でございました。だから、英語英文学科に行きたい学生、国語国文学科に行きたい学生、フランス語フランス文学、それぞれバラバラなのですね。それを、入ってきたとたんに囲い込んで、あなたはA学科の学生だからという形で縛っていきます。自分の学科の学生をわが子のように慈しんでいただいている先生が多いので、それはそれでよろしい面はあります。何か事件や問題があったら、わが子のようにいろいろ世話を焼いてくれますので、大変よろしいのですが、ただ、それはこれだけ学際的な時代になって、あるいは基礎教養としてのいろいろな知識だとか、判断の健やかさを持つ人材を求める時代に、4年間完全に囲い込んで専門の勉強だけをさせる時代ではもうありません。そこをどう乗り越えるかということで、ちょうど1学科制と同時に、学部一括入学、2年次の専修分属制度をとりましょうという提案をしまして、これもかなりすったもんだしたのですが、通りました。

どうやって分属させるのかということ、学生の希望による分属をします。希望によってアンバランスが生まれるのではないかと反対が出ます。アンバラ

ンスが生まれるのだったら何か考えなければならない。「おそらく8割か9割は間違いなく希望どおり第1希望で行けるはずです」「そんなことやってみないと分からない」「ではやりましょう」そういう掛け合い問答のようなことをしながら、なんとか開始しました。現在、希望による分属で、この2年間ともに、おおよそ第1希望で95パーセントの学生が専修分属しています。

従来ありました学科の定員の1.3倍を想定して、1.3倍ぐらいのところに、各専修の最大受入数を設定しております。それで何とか、ほぼ第1希望で分属が終わっている状況です。どうしても学生の希望の少ないところが弱くなったりすることはあるのですが、何とか大きな矛盾なく回っているというのが現状です。

1 年次に 3 種類の共通専門科目を設置

それで、1年次にはまだ学科が決まっていませんので、ぜひ学部共通専門科目群を置きたいということで、そこにありますように三つの種類の共通専門科目を置きました。一つは、「学びの扉」という名称の入門講義型の授業です。入門講義型というのは、まだ専修の決まっていない1年生に対して、複数の教員がリレー方式で各専修の学問内容を自分の研究テーマの紹介とともに1 Semesterをかけて紹介するタイプの授業です。自分のところの専修はこういう特色があるよ、こんな研究をしているよ、あなた方の先輩はこんな卒業論文を書いているよ、われわれの専修にはこんな教員がいるよ、といったようなことを教える授業です。これは専修の数のだいたい2倍から3倍の数を開講しておりますので、かなりの種類と数の入門講義型の授業があります。

二つ目が入門演習型の授業で、「知へのパスポート」という名前が付いています。これは専修の専門内容にかかわる1年生向けの入門ゼミです。ですから、例えば私だったら西洋史学ですので、来年になったら歴史学専修という名前になるのですが、この歴史学専修の西洋史分野の内容に即してゼミ形式の授業を新入生向けにやっています。多いところで50人以上になりますが、少ないところでは場合によって8人とか5人とか大変少ない人数の1年生向けの入門演習になっています。

「知のナビゲーター」で共通スキル形成

最後が、初年次導入教育にもっとも関係のあることだと思いますが、「知のナビゲーター」というフレッシュマンセミナー型の授業です。これはあまりたくさん開講することができませんで、初年度は8クラスでした。やがて16クラスということになります。最高20人という上限を置きまして、実際には10人から20人ぐらいで動いている1年生向けの授業です。基本的には文学部の共通スキル形成を意図した授業で、1年生の前期春学期のみの開講になっています。本日資料にありますものは、知のナビゲーターの共通シラバスです。資料をご覧ください（P63資料1－2）。そこの講義概要のところにありますように、特定の専修に進むために必要な知識の習得ではなくて、大学生として学ぶためのスタディスキルの育成に焦点を当てています。

ここでは七つのポイントがあります。ちょっと読み上げると時間がかかりますので、ご確認いただきたいと思います。つまり読む力、内容を読んでまとめて文章を作成する力、自分自身の見解を文章に作成する力、発表する力、質疑、議論する力。それから、動機付けやテーマの発見、それから、大学の学習に必要な技術の習得等でございます。

この中で、すべてのクラスがこのすべての7点を押さえてやっているわけではありませんで、各先生の特徴や得意不得意を考えまして、最低この七つの中から半分程度は焦点を当てて Semester の授業をしてください、講義計画をつくってください、ということになっています。資料にありますのは中澤先生の授業です。中澤先生はこのクラスにおいて、そこにあります1、2、3、4、5を中心に、重点を置いてやります。特にその中で、哲学が専門の先生ですので、ロジカル・シンキングとクリティカル・シンキングを中心にして授業を進めるということになっています。中澤先生が具体的に授業で使っておられる資料やテキストを見せていただいたことがあるのですが、大変面白いです。おそらく専門職大学院の、ロースクールの適性試験の論理テストに使われるようなタイプの内容をこの1年の前半でやっています。

8割以上の学生が好意的な反応に

その次に、ちょっと不完全なアンケートで申し訳ないのですが、2005年7月、昨年度実施しました知のナビゲーターに関するアンケート結果を資料

で付けております（P64資料1—3）。最初の円グラフをご覧いただきたいと思いますが、2005年度の受講生で言いますと、知のナビゲーター、学生はこれを「知ナビ」と呼んでおりまして、知ナビの授業内容は期待どおりでしたか、ということに関して、「強くそう思う」が30パーセント、「ややそう思う」が50パーセントありますので、両方合わせて80パーセントの人間がそのように思っている。右側が、大学で学習していくために必要なスキルは身についたと思いますか、ということに関して、「非常に身についた」が14パーセント、「やや身についた」が70パーセントということで、こちらも84パーセントが好意的な答えを出してくれています。

ただ、最近の学生は割合、気持ちのやさしい学生が増えまして、こういうアンケートを採りますと、先生にショックを与えるのはかわいそうだと、少し手加減して答えますので、あまり舞い上がってはいけないのですが、まずまず初期の目的を果たしたのかなと思っています。時間が限られますのでアンケートの紹介はそこまでいたしまして、次の話に移らせていただきます。

初年次教育に競ってエースを投入

このような改革をしたことによって、いくつか副次的な悪影響があったのではないと言われていたのですが、今のところあまり大きな悪影響はありませんで、むしろ思わぬ効果がいくつか現れています。一つは、組織改革によって競争的な環境になりました。学生によって私たちの学問分野が選ばれるということになるわけです。当然、選ばれない恐れもあるわけです。そこで、どんなことが起こったかといいますと、各専修、専門分野のエースと目される人が1年の授業を持つようになりました。これはすごく面白い。彼らは必死であります。人数があまり集まらなないと、自分の専修がお取りつぶしになる可能性があるわけです。先ほど言いました採用人事改革も重なっております。学生が少なくなったのでもう人事配置しないということが当然あるわけです。学部長としては、基本的にはそういうことにならないように、さまざまに配慮して運営してきていますが、可能性としてやはり枯れてしまう恐れがあります。だから、エースが出てきまして、かなり学生に寄り添ったかたちで授業をしてくれています。これは手応えとしてはものすごく大きかったです。多少予想はしていましたが、ここまでというぐらいにしっかりやってくれて

います。素晴らしいことだと思っています。

それから、知のナビゲーターに関しても、かなり一所懸命やってくれまして、先ほど言いました共通シラバスとか、担当者の連絡会議も、土曜日に毎週やっておりました。その成果の一部は、(株)くろしお出版から近く刊行されると聞いております。知のナビゲーターに集まった人間、教員が中心になってこの部分をしっかりと仕上げているという手応えがありまして、大変うれしく思いました。

人間的成長が著しい「学校インターンシップ」

二つ目にご紹介したいのが「学校インターンシップ」という事業でございます。これは東京都の八王子市のほうで先行事例がございました。先ほど言いましたように、大学と社会との連携をしたい。そのなかでとりあえずできるのは高大連携、これだったらなんとかできるかもしれないと思いました。八王子市では小学校でやっていましたが、私どもでは高大連携の一環として、高校とお話し合いをしながら、執行部を中心に、96名の学生を1年目、40を超える高校に研修生として送り出すことができました。これは人数がすごく多かったわけですが、それだけではなくて、帰ってきた学生が目を輝かせて自分の経験を語ってくれます。

当初、私どもは、「教職版のキャリアデザイン」という考え方でこの事業をとらえていたわけですが、行ってきた学生がこちらの期待以上に人間としてすごく成長してきたことに驚きました。帰ってきた彼らが自らを語るときに、自分はなんとはいなしに大学生になったけれども、これから一所懸命勉強しないといけないというのがわかったというのです。これはちょっと感動ものでした。それからもう一つ、同じようなことなのですけれども、自分がどのように育てられたかわかったという感想が2人、3人から出てきました。今まで教わる側、ケアされる側ばかりだったわけですね。それが初めて現場に行ったことによって、自分がどのように今までケアされてきたかわかった。どのように先生から見られて、どのように教えられてきて育てられたかがわかったという感想がありました。これはなかなか良かったです。

高齢化している学校現場のなかで、中堅の先生方が特にそうなのですが、手ぐすね引いて若者を待っておりまして、「長い間、自分が教える対象がい

なかったのに若いのが来てくれた。教員になりたいらしい。自分の知識を全部教えてやる」というかたちで、本当に熱い指導をしてくださった現場の先生が多数いらっしゃいました。また、高校生にとってはお兄さんお姉さんの大学生がクラスに入ってきますので、これはロールモデルとしてかなり有効であったかと思えます。

必修を減らしモデルカリキュラムを設定

最後ですが、3番目の話をちょっとだけして終わりにします。2006年の春から私たちは授業のあり方を、カリキュラムの自由設計のかたちに向けてシステムを大きく変えました。先ほど言いましたように、1学科多専修にしたこともありますので、今まで専門の60単位から80単位のうち、専門の40単位前後が必修科目だったのですけれども、それに大幅なスリム化をおこないまして、必修科目の単位数を最低で16単位、多いところでも24単位で留めました。つまり124単位のうち、専門に関して言うと16から24単位が必修科目で、それ以外は全部選択にしました。これはある面で危険ではありますが、かなり大きな実験です。ただし、まったく自由化にすると教育が成り立ちませんので、モデルカリキュラムを導入しました。これはあくまでモデルですので、規則上はその通り取る必要はありません。だけれども、これをやればここまであなた方の力を保証しましょうというかたちでモデルカリキュラムを提示します。専修ごとにだいたい3種類あります。かなり広い、副専攻を含むようなものと、かなり狭いけれども高いレベルまでいくもの、そしてその中間。そういったものを用意して、どれでもいいから、モデルカリキュラムを手がかりに、自分のカリキュラムをつくりましょうということ、ある意味で挑戦なのですが、することになりました。当然、ガイダンス機能を圧倒的に強化しないと成り立ちませんので、ここは教員のつらいところですが、ぜひそこをしっかりとやりましょうということになりました。すなわち、「カリキュラムの体系」ではなくて、「カリキュラムの設計」でやっていきたい。その中で副専攻制度、あるいはダブルメジャーの問題もここで解決したいと考えています。

ちょっと雑駁な話になりましたが、時間が過ぎましたので、以上にさせていただきます。ありがとうございます。

（発表2）日比谷 潤子氏

08年度に教養学部改革を実施予定

足立 芝井先生、ありがとうございます。では、次に日比谷潤子先生、よろしくお願いいたします。

日比谷 ICUの日比谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

すでにご覧になった方もたくさんいらっしゃるかもしれませんが、ICUの大学のホームページを開けていただきますと、左側の一番上の部分に、「2008年春、ICUの新たな歴史がはじまります」というバナーのようなものが出ております。そこに「詳しくはこちら」というところがありまして、そこをクリックしていただきますと、教養学部改革についてというところが出てきます。このように、私どもは2008年4月を目指して、現在の教養学部をかなり大きく改革する計画を今立てているところでございまして、今は2006年12月ですから、その作業が進んでいるところです。

本日はすでに決定していることを中心に、今、議論していることも含めて、このたびの改革の考え方、そして私どもがどういう大学を新たに目指しているかということ、30分間ですけれども、お話しさせていただきたいと思えます。

なお、決まっていないことはホームページに出せないのですが、どんどん毎月いろいろ新しいことが決まっていくという進行中の段階でございますので、決まったものは随時アップロードしていきますから、今日途中までお話ししていることがどのようになったかということは、今後、ホームページでご覧いただければ幸いです。

ホームページには、「ICUの新たな歴史がはじまります」と書いてあるのですが、新たな歴史がはじまるということは、これまでの歴史もあるということになります。例えば立教大学は130周年という名刺を先ほどいただきましたけれども、それに比べますと、私どもの大学はだいぶ若い大学でして、1953年に開学いたしました（P67資料2—②）。このときに大学ができた目的はいろいろございますけれども、その一つとして、第二次世界大戦の反省に立ち、恒久平和の確立に資する人材を輩出していきたいということが大きな目標としてございました。そのためにどういう教育が必要かという



日比谷潤子氏

ことを考えたときに、いわゆるリベラルアーツが最もふさわしいのではないかということになり、教養学部1学部制度、当時としては国内唯一の本格的なリベラルアーツ型大学として出発いたしました。

特徴がいくつかございますけれども、その一つ目は、懇切丁寧な学習支援。これは、具体的に申しますと、「アドヴァイザーシステム」というしくみです。学生は入学しますと、われわれ専任教員の誰か一人が必ずその学生のアドヴァイザーとなります

す。教員の側から見ますと、例えば今、私はだいたい40人ぐらいのアドヴァイジーを持っておりますけれども、1年生から4年生まで、いろいろなタイプの学生の学習指導を日常的にしていこうということになります。

それから、オフィスアワーを設けまして、週に約2時間程度ですけれども、オフィスを開放して、アドヴァイジーだけでなく、それ以外の学生も何か用があるという場合には、オフィスアワーであれば自由に何でも質問に来ることができます。また今は電子メールの時代ですので、オフィスアワーに都合が悪いという場合は、アポイントメントをとって相談に来るというような状態になっています。これをずっと続けてまいりました。これが第1の特徴です。

2番目は、もともと創立のときに日本とアメリカのキリスト教徒が中心になってつくった大学という経緯がございますので、日本語と英語、二つの言語を公用語とするバイリンガリズムを貫いております。これは英語教育プログラム、日本語教育プログラムに始まり、実際の授業、もちろん日本語で開講しているものもございますけれども、英語で開講されている授業がすべての分野で相当数ございます。これが二つ目の特徴です。

それから3番目は、これはリベラルアーツの特徴と申し上げてよろしいと思いますけれども、現在、一つの学部で六つの学科を持っております。しか

し、その学科の間の壁というのはかなり低くなっております。したがって、それぞれの学科に応じていろいろな履修の条件はございますけれども、学間分野間の境界を越えた知識が探求できるように、なるべく柔軟な履修構造をとっているということも特徴の一つかと思えます。

米国リベラル教育学会のプログラム認証に

おかげさまで、このような三本柱に沿ってこれまで進んでまいりまして、例えばベネッセ教育総研が実施した全国大学満足度調査で1997年以降、3回にわたって1位にランクされている。あるいは2003年には、特色GPで「責任ある地球市民を育むリベラルアーツ」というテーマで選ばれて補助金を頂きました。また2005年には米国リベラル教育学会のプログラム認証も受けました。これはアメリカで主にリベラルアーツを提供している大学を対象におこなわれているものなのですが、いくつかの基準というものがありまして、その基準をいかに満たしているかということ、様々な学内の調査などに基づいて、この米国リベラル教育学会というところに提出いたします。そうしますと、書類審査に加えて、総合的な見地から、この会の基準を満たしているかということのチェックのために、実際に評価をなさるチームの方々が来られました。その結果、2005年にプログラム認証を受けることができました。

先ほど、これは檜枝先生にいただいたお名刺には、「立教大学」と書いてあるところに、キャッチフレーズと言うのでしょうか、「自由の体感、共創のステージへ」と書いていらっしゃいます。私どもも今、改革が進んでおりまして、このキャッチフレーズを何にするか今考えているところなのですが、おそらくあと半年ぐらいますと、「世界基準。ICU」という名刺を持ってあちこち配ってまわるようになると思います。このプログラム認証を受けたのも、世界基準に照らしてリベラルアーツの教育を確かに提供しているということをぜひ保証してまいりたいという気持ちの表れでございます。

外的要因、内的要因から改革案を議論

さて、このように申し上げてまいりますといいことばかりのようなのですが、実際には今後改革が全然必要でないというわけでは、当然ながら

ありません。

その一つの理由が外的要因でして、これは総長の大橋先生もちょっとおっしゃいましたし、皆さまよくご存じのことですから飛ばします（P68資料2—③）。もうひとつ、ICU 内部にもいろいろな改革をしなければならぬ内的な要因というものがございます。私どもの大学は三つの学科で出発いたしましたけれども、その後時代とともに、さらに三つの学科を加え、現在はさきほども申し上げたように6学科体制となっております。

しかし、学科間の開講科目でかなりのダブリがあったり、いくら履修構造が柔軟であっても、入り口の時点で第一志望、第二志望を指定して受けなければならないといったりしたような問題もございます。

そこで、このような問題を解決するために改革を行おうではないかということになりまして、昨年1年かけてさまざまな改革案を議論いたしました。その結果、2006年の4月にその改革案が教授会で承認されまして、今、私がございます教学改革本部が、2006年5月1日に発足いたしました。

その改革の内容をこれからご説明しますが、目標は、「時代を担う若者に21世紀の挑戦に立ち向かう力を与え続ける」ということにご 있습니다。こう申しましてもちょっと抽象的なので、もう少し具体的にお話いたします。

30程度のメジャー（専攻分野）を設置

まず六つの学科を廃しまして、1学部1学科制度に2008年4月から移行する予定です。それを表しましたものが、こちらの図と言ったらよろしいかと思います（P69資料2—⑤）。それで、現在は図の左側にご 있습니다ように、受験のときに学科を指定して、第一志望で合格するか、第二志望で合格するかわかりませんが、どこかの学科に所属して学んでいくというふうになっております。しかし移行後は、入学するときには特に第一志望、第二志望の学科を指定しませんので、まとめて教養学部に入學します。1学部制度ですので、教養学部というのも、もしかしたらあまり重要ではなくて、ICUの入學試験を受けてICUに入學するというかたちになります。

それでは、そのあとどのように進んでいくかと申しますと、4月に入學する学生の場合、先ほどお話しました日・英語のバイリンガリズムという大

原則がございまして、1年次は非常に多くの時間を英語教育プログラムに費やします。これは導入教育の一つととらえられていますので、いわゆる語学教育プログラムではありません。大学でさまざまな研究活動を続けていくために必要な、批判的な思考力を培っていくためのプログラムとして位置づけられています。1年生のときはそれを中心に受講しますが、合わせて、3年次以降は、今ここにだいたい30ぐらいのものが並んでいるのですけれども、さまざまな専攻分野、これを私どもは「メジャー」と呼んでいますけれども、このメジャーに分かれて履修します。

「基礎科目」にはエースをなるべく投入

メジャーを提供しているところは、教員が所属する「デパートメント」と呼ばれているものです。現在は六つの学科に専任教員が分属しておりますけれども、2008年4月以降は、16のデパートメントができます。このデパートメントにそれぞれ教員が所属し、これが教員組織となります。受験生、あるいは学生から見ると、このデパートメントというのは、あまり重要な意味は持っていないかもしれないのですけれども、デパートメントによっては一つもしくは複数のメジャーを提供し、それぞれのメジャーの科目の運営に責任を持つという体制に変わります。

例えば、一番上に人類学というのがございまして、下から5番目に社会学というのがあるのですが、この二つは「社会学・人類学デパートメント」という一つのデパートメントが提供する二つのメジャーとなっています。一見、バラバラに並んでいるようにお考えになると思うのですけれども、実は、これは英語版もございまして、英語の科目名を想定していただくと、そのわけがおわかりいただけると思うのですが、英語名のアルファベット順に並んでおりまして、その順序に合わせておりますので、日本語だとバラバラに並んでいるように見えるわけです。

それぞれのメジャーには、「基礎科目」というのがございまして、これがそれぞれの分野の概論的なものを担当するということになります。芝井先生のお話で1年生の授業にはエース投入というのを、お聞かせいただいたように思いますけれども、本学でも、各デパートメントがそれぞれの基礎科目にエースをなるべく投入します。多くの基礎科目で、学生は1年生のときから、

自分はここを専攻したいとあらかじめ考えているような科目の基礎科目からまず取っていくということになります。

また、自分の専攻したい分野の基礎科目を取るだけではなくて、ほかの分野の基礎科目も必ず取るような構造になっており、ある程度広く学ぶということも保証しております。たとえば、入学するときにこういうものを勉強したいと思って入ってきて、それがそのまま自分はやはりこのまま進むというようにいく場合もあると思います。けれども、人によってはいろいろな基礎科目、これは「探索科目」などとも呼んでおりますけれども、自分が最初から想定していなかった分野の基礎科目を履修して、あちこち探索してみた結果、そちらのほうがやはりいいということになる場合も当然考えられます。最初の2年間はそうにして、あとは一般教育科目や保健体育科目も履修しながら、2年次の終わり、私どもは3学期制をとっておりますので、1年生から入って6学期目に自分の主たるメジャーを決めるということになります。

そのほかにマイナー、いわゆる副専攻の履修もちろん可能です。これはメジャーに比べますと多少単位数が少なくなりますけれども、二つの分野をそれなりに専攻することが可能になります。このほか、ダブルメジャーという制度も想定しております。この場合は、主専攻を二つ持つということになります。これらの制度は、最初は主専攻とか副専攻という日本語を使うつもりだったのですが、ダブルメジャーというと、「複主専攻」となり、複数の「複」が頭に付き、マイナーはサブという意味の「副」が頭についた「副専攻」となり、あまりにも紛らわしくなってきます。そのため、カタカナ名で全部表記することにいたしました。

もちろん、一つのメジャーだけ選択し、あとは履修要件にあわせて必要な選択科目だけを取っていても卒業はできます。しかし、私どもとしては、自分が選択したものについては、きちんと体系だった学習を通して深く学ぶことはもちろんですが、広く学ぶというリベラルアーツ本来のねらいからも、最低でもメジャー・マイナー、もし可能であれば、ダブルメジャーをぜひ目指してほしいと考えております。

複数分野の問題解決型メジャーも

それからもう一つ。これは現在でもそうなのですが、4年次には、卒業論文が全員必修となります。「卒業研究」というかたちで単位も付いており、最終的に論文を書かないと卒業できない。かつ、先ほど申しました日・英語のバイリンガリズムの方針から申しまして、卒業論文を英語で作成すると学生がかなりのパーセンテージに上ります。

今までお話ししてきたことは、それぞれのデパートメントが単独で提供するメジャーについてのお話でしたが、複数のデパートメントが協力して運営していく「IDメジャー（インターディシプリナリーメジャー）」というものもつくっております。アメリカ研究、ジェンダー研究、環境研究、それからグローバルスタディーズほかとなっております、これ以外にもまだ、日本研究とか、いくつか立てるつもりであります。

21世紀の社会には様々な問題があり、このような問題は、専門分野の線に沿って起こってくるわけでは当然ありませんで、いろいろな分野の視点を複合的に使っていないと解決しないことばかりだと思います。そこで、IDメジャーは、分野の性質にもよりますが、複数のデパートメントによって提供される問題解決型のメジャーとなります。例えば環境研究などはその典型になります、IDメジャーについては、必修とはしないのですが、できれば、ダブルメジャーとかメジャー・マイナーとして履修する場合は、ぜひ取るように学生には奨励する予定です。

それから、教員のほうも今六つの学科に分かれておりますけれども、16のデパートメントになりまして、これはうまくやらないと六つに分かれていたものがさらに16に分かれるだけになり、先ほどおっしゃったタコソボ化をさらに招くような結果になってしまいます。

そこで、一つの対策として、われわれはそれぞれだいたい年間に何コマずつ教えるというロードがございますけれども、そのティーチング・ロードの一定の割合は必ず複数のデパートメントが協力して提供するIDメジャーのなかで教えなければいけないというガイドラインを設けております。こうすることによって、自分の所属するデパートメントやメジャーだけの狭い範囲の中で教育を考えていくのではなく、ほかのデパートメントもしくは分野を専門とする教員と協力しあって教育プログラムを提供していくことによ

って、自分自身の視野も広めていくことが可能になるわけです。これは、ある意味でFD活動の一環とも言えるかと思います。

4年間の学生生活をプロデュースさせる

そして最後になりますが、先ほどICUの教育の特徴といたしまして、懇切丁寧な学習支援、バイリンガリズム、柔軟な履修構造ということをお願いしました。この中で、特に懇切丁寧な学習支援についてもう一度戻ってお話ししたいと思います。今ご説明したような新しいシステムになりますと、よほど懇切丁寧に学習支援をしないと、自分は何を専攻分野としたらいいかわからない、あるいは、あちこち取ってしまって本当に迷ってしまうという学生も出かねないわけです。そこで、これまでのアドバイザー制度をさらに少し違ったかたちで展開していくことを考えております。

アドバイザー制度というのは、教員はアドバイスする側であって、学生はアドバイスを受けるという想定になっております。しかし、これからはアドバイスを受け身の状態で聞かせるだけではなくて、4年間の学生生活をどのようにプロデュースしたいかということを中心に考えさせること（アカデミック・プランニング）も必要です。そこで、これまでどおりのアドバイザー制度は堅持しますが、「アカデミック・プランニング・センター」、これはまだ仮称でございますけれども、そういう組織をつくろうと考えております。

アカデミック・プランニングの実施にあたっては、自分が関心を持っている分野が何かということについて、入学前に一定の意識調査をすることになると思います。そして、その時点での関心に応じた分野に関わる教員が最初のアドバイザーとなるように割り振ります。

この専攻分野だったらこういうことが勉強できますよというような、見通しを示すのはそれぞれのデパートメントの責任において行われます。例えばホームページでモデルカリキュラムを提示するとか、よくある質問に答えを用意するというのももちろんですけども、それぞれの分野がどのようなミッション、つまりこういう分野を提供するのはどういう使命があってこの分野を提供しているかということを詳しく提示することが必要になります。

これは、米国リベラル教育学会のプログラム認証にあたって要求されてい

ることの一つで、「ラーニング・ゴール」という言葉が使われておりました。これは、それぞれの分野の学習目標、つまり、この分野で卒業したらこういうことができるようになる、そしてそれはその分野の教育的使命とどのような関わりを持っているかということを示さなければいけないということです。そのため現在、2008年から発足する新しいデパートメントを構成するそれぞれのメジャーに対して、どういうミッションのもとでその専攻分野を提供するのか。そして学習目標は何かということを担当教員から出してもらって本部で精査しているところです。

学生は入学後、いろいろな基礎科目の履修を通じて2年次の終わりには、最終的に自分がどの分野をメジャーとするかを決めることになります。そして3年生になるとアドバイザーは自分の所属するメジャーの教員に変わります。入学したときからずっと関心のある分野が変わらない学生でしたらアドバイザーも変わりませんけれども、多くの学生は、入学時とは関心のある分野が変わり、それに応じてアドバイザーも変わることは当然、想定されます。

なお、複数の分野をメジャーとするダブルメジャーの場合には、どちらか一方で卒業論文を書くことになります。その場合、例えば3年次についてアドバイザーの専門分野とは別のもう一方の自分のメジャーで卒業論文を書くのであれば、その分野の教員にまたアドバイザーが変わる可能性があります。そのような場合、多くて4年の間に3人のアドバイザーに付いて懇切丁寧に具体的な学習の支援、そして履修指導を受けていくということになります。

行動するリベラルアーツを实践

先ほど、次代を担う若者に21世紀の挑戦に立ち向かう力を与え続けることが今回の改革の目標だと申しましたが、21世紀の挑戦に立ち向かっていくために必要なことはたくさんあると思います。例えば、ある程度の知識の蓄積ということはもちろん大事ですけれども、やはり「アクティブ・ラーニング」、われわれの最近の標語で、行動するリベラルアーツのことですが、これが一番大事だと思います。これは、例えば海外のフィールド・トリップというような授業は今でもございますが、教室の中で知識をただ積み上げて

いくということではなくて、非常に多くの学生が大学の外に出て、さまざまな体験や活動に参加して、帰ってきて報告をするということが日常的に行われていますけれども、そういう部分をさらに強化するということです。

それからもう一つ最近力を入れていることは、「サービス・ラーニング」という取組です。いろいろな分野でサービスをすることを通して学んでいくわけです。このような二つの取組を柱にして、新しい教育プログラムへと脱皮していきたいと考えているところです。

これから随時新しい情報もホームページにアップロードしてまいりますけれども、2008年4月からは今お話ししたような大枠の中でICUの教育は深化します。創立当時に考えていた使命というものを堅持はいたしますけれども、21世紀にふさわしいかたちでそれを衣替えし、さらに深めていきたいと思っております。

時間となりましたので、ここでいったんやめまして、またのちほどディスカッションの時間に何か補足することがあったらお話ししたいと思います。ありがとうございました。

(発表3) 濱口 哲氏

teaching から learning の時代に

足立 日比谷先生、ありがとうございます。ここでいったん休憩を取らせていただきたいと思います。(休憩後) それでは濱口先生、よろしくお願ひします。

濱口 どうも今日は、このような機会を与えていただいて、ありがたく思っております。

私は一昨年、立教で大学教育学会の課題研究集會が開かれたときに来ております。それ以来ですけれども、今日キャンパスの立派なクリスマスツリーを見せていただいて、大変うれしく思っております。

それから、私ごとですが、檜枝先生がセンター長だと伺いましたが、檜枝先生のお名前は、私が駆け出しの大学院生のころに放射線生物学をやっていた関係でよく存じ上げていて、それも懐かしいと言うと変なのですが、何かの縁かなという気がしております。ちょっと座らせていただきます。

今日お話しするのは新潟大学の新学士課程教育システムとして、分野・水準表示法と副専攻制度を新潟大学が取り入れているということになりますが、少し背景を含めてお話しさせていただきます。

私の商売はこの図のように、メダカをすくって歩くことです (P72資料3-2-②)。新潟は日本で唯一、食べ物としてメダカを食べていたところで、私は新潟出身ではないのですが、そういうところに行ってメダカを使って性決定とか性分化ということをやっているのも何かの縁のように思います (P73資料3-2-③)。そういうことをのどかにやっていたいというのが私の心からの願いなのですが、近ごろこういう忙しい時代になって、教育と研究以外に、このような管理運営にかかわる業務も担うという状況になっているわけです。

これはそういう私の大学における仕事を模式化した図なのですが、一つ多少本日の話題である新潟大学の教育改革として意味があるのは、私の所属は教育研究院自然科学系、教育としては理学部の自然環境科学科と自然科学研究科の大学院の担当をしている、それに加えて、研究があり、管理・運営業務があるという構造になっているという点だと思います (P73資料3-2-



濱口 哲氏

④)。

今日お話しすることはだいたい五つぐらいということで、少し欲張りなのですが、まず、1番目に、全体としてどういうことを考えているかということです (P74資料3-2-⑤)。次に、具体的な課題としてどういう措置、どういうことをやったかということについてご説明していきたいと思います。

まず、背景となる状況についての認識ですが、これはもう先ほどからいろいろお話があって、もう今さら

言うこともないのですが、まず、学生の状態が量的に変わっているということがあります (P74資料3-2-⑥)。ただ、それに加えてのもう一つの問題は質的な変化というのが非常に大きいということもあろうかと思えます (P75資料3-2-⑦)。ある本によりますと、1980年で青春とか青年という存在がなくなると。青春とか青年というのがいつから始まったかという19世紀で、それが1980年になくなって、今は青年ではない若者への教育をする状況になっている。従来の大学というのは、いわば青年の教育組織として設計されているようなところがあって、その点は、先ほどからいろいろな先生がおっしゃっていることですが、私どももそういう根本的に違ってしまいつつある若者に対して、新たな教育システムをつくらなければいけないのではないかということを考えています。

そういうことも無関係ではないのでしょうけれども、高等教育自体も変わってきている。つまり、「何を教えるか」から、「いかに学習を深めるか」へと、teachingからlearningへという変化があると思っています (P75資料3-2-⑧)。つまり、よく言われる3文字学部から4文字学部、6文字学部という変化ですが、当初は理学部、文学部、法学部等々といった3文字学部で、それは学問分野を基盤とした学部・学科だった。ところがその後、4文字学部が現れ、さらに6文字超学部も出現する。例えば私の学科は「自

然環境科学科」といいますが、そういうものはもはや学問分野の名称ではありません。ではそれは何かというと、教育プログラムということになります。そうした状況を振り返ってみると、従来型の3文字学部等も、今日、学問分野を基盤とした学部、学科という存在であり続けることは、もはやある意味ではかなり苦しい時代なのかなという認識もあります。

自立した創造的学習者をつくる

新潟大学の話をするので、新潟大学がどういう大学かということをご説明します (P76資料3-2-⑨)。日本海の寒風にさらされている大学ではありますけれども、9学部、5研究科、学部学生数が約1万1000人弱、大学院が2500人ということで、だいたい学生数は1万3千人ぐらいの規模の大学です。いろいろなことを考えるときに、規模というのはかなり重要なファクターだなということをしみじみ感じております。

最近は法人化したあとは、理念・目標を明確にすることが旧国立大学にも必要になりました (P76資料3-2-⑩)。先ほどICUは非常にきちんとした理念・目標を示されました。実は数週間前に慶應大学でお話しする機会があったのですが、慶應でお話をうかがうと、必ず最初に福澤先生が出てくる。それに引き換え、新制大学は大変苦しいところがありまして、法人化するときにつくった理念・目標がこれです。

「高志の大地に」ということですが、これは言うまでもなく新潟地域を示す古い言い方なのですが、高志、高い志だということを強調しています。「自立と創生を全学の理念として」ということがありますが、これは今後使えるフレーズだと思っています。

新潟大学の教育目標として、「精選された教育課程」、「豊かな教養と高い専門」、「時代の課題に的確に対応し云々」ということが書かれています (P77資料3-2-⑪)。少し中身を考えるわけですが、これが先ほどの質の変化にもつながる話だと思います。「時代の課題に的確に対応する」とはどういうことでしょうか。21世紀は知識基盤社会だと言われている話の流れから言いますと、結局、知識創造的な、つまり生涯学習をしていく能力を身につけた人材を養成するというのが、高等教育機関の一つの重要な仕事ということになります (P77資料3-2-⑫)。言い換えると、それは、「自立した

創造的学習者をつくる」ということになりますが、新潟大学の教育目標はまさにそれを標榜しているということになるとわれわれは考えています。「豊かな教養と高い専門知識」ということですが、これは言うまでもなく学修の広さと深さということで、広さについて言えば、新潟大学には9学部の広い、いろいろな分野の教育資源があるということを考え、それを全体で使わない手はないということです（P78資料3—2—⑬）。そういう目的で、新潟大学で開設されている全授業科目を全学の学生が活用可能なかたちにすることによってわれわれは取り組んでおり、それが分野水準表示法というかたちとなっています。

深さについては、先ほどからもお話があったように、主専攻とか副専攻というのはある種のコンセントレーションのある学習をするという意味で、学生に学習の深さを要求しなければいけないと思っているわけです。

「精選された教育課程」については、これは単位の質保証と学位の質保証ということになりますが、ここでは文言だけにとどめます（P78資料3—2—⑭）。

以上の教育目標を実現するための取り組みがわれわれの新学士課程教育システムです（P79資料3—2—⑮）。

4年間の教育プログラム化を目指す

その取り組みがいつから始まるかというのは、なかなか微妙なことではあります。ここにいわゆる設置基準大綱化、教養課程と専門課程の廃止以降、新潟大学がずっとどのように取り組んできたかのあらましが書いてあります（P79資料3—2—⑯）。大綱化を受けて、新潟大学では平成5年に課程制を廃止、平成6年に教養部を廃止しました。その後、新たな枠組みで教養教育をどのようにやっていくかということを学内でいろいろ議論していたわけですが、そういう状況のなかで平成10年に、いわゆる大学審答申が出ます。それを受けて評議会である種のグランドデザイン、当時はいろいろな問題があって討議資料という言い方になったのですが、一つの方針を立てました。それによっていろいろな改革が行われました。

平成12年7月、学内の大学教育委員会で全体の教育改善をどのように進めるかという方針を立てました。そして、その線にしたがって、GPA制度や

CAP 制度などの、いろいろな教育上の道具の導入を進めてきたということです。

また、平成14年1月に教育研究院というものを発足させたのもこのグランドデザインに因ります。この時期にはまだ教員の認識もおぼつかない、教育研究院というのは具体的に何をするのかよくわからないまま、教員は教育研究院に所属するというかたちになったのですが、その後、平成16年の法人化を受けて、今、この教育研究院制度等も活用しながら、従来の先ほどから、縷々、タコツボというようなお話もあるわけですが、そういうことを脱した新たな教育体制を志向する改革を進めています。

これは新潟大学としてというよりかなり私的な認識なのですが、大綱化以降の10年というのは何だったのかということを考えています (P80資料3—2—⑰)。大綱化以降先ほどから言っている若者の変化だとか時代背景に少しずつ合わなくなってきた専門課程と、脆弱化した教養課程を合わせたこと、そういうことをわれわれは10年間やってきたのではないかという反省があります。つまり、教養部がない状況で教養科目を走らせるということはなかなか難しい。それがどのように機能したかという、専門課程が相変わらずのままであることを許す機能を果たしてきたのではないかという認識があります。われわれが取り組んでいることは、その両方をきちんと機能するものに変えたいということです。

まず、授業科目の内容をきちんと担保するということです。その上で、ずっと問われ続けていることですが、専門教育を含めた4年間の教育プログラム化をしたいということが、今われわれのやっていることだと、私は考えています。

もはや定員というのは存在せず

具体的にやっていることとして、いくつかのことがあります (P80資料3—2—⑱)。一つは、教員の所属組織を変えたということです。第2には、授業開設体制を変更して、全学教育機構というものをつくった。第3には、科目区分の撤廃。いわゆる教養科目と専門科目という科目の区分を撤廃して、すべての授業科目について分野と水準を表すコードを付けた、ということです。それを基礎として、副専攻制度を導入しました。そして、その経験を生

かしながら、近未来にいわゆる現在動いている学部・学科の教育というものを主専攻プログラムということをも明確に意識した体制に移行することを計画しています。それを模式的に描いたのが、この資料にも付けた図ですが、従来はこのようなかたちで、教養教育と専門教育という二元的な責任体制のもとでの教育がおこなわれてきたものを、一元的なプログラムで行うかたちにしたということです（P81資料3-2-⑱）。

まず授業開設体制の変更ということですが、具体的には、それは教員の所属組織の変更と全学教育機構をつくったということになります（P81資料3-2-⑳）。教員組織、今の新潟大学の人事単位はこうになっておりまして、教育研究院というものがございます（P82資料3-2-㉑）。それが多くの学部・学科、従来の学部・学科の先生の組織ということになります。それ以外の人事組織としては、病院と脳農研究所等がありますが、全学教育機構にも一部、専任教員がおります。それから、研究特化の教員（超域研究機構）や、共通基盤組織であるとか、学長理事直属組織の教員もいます。従来の教育研究を主務とする大学教員という概念に少し取まらない教員、教授、助教授というのも置くという体制になっていて、それらの定員管理はすべて全学教員定員調整委員会でやるということになっています。つまり、先ほどもお話があったように、後任補充という概念がかなりいろいろなことの阻害要因になる。だから新潟大学としては、定員管理というよりは、もはや定員というものは存在していない。それで、一つ一つの人事機会に対して、全学の観点で検討したうえでそれをやっていく。むしろ定員管理から人件費管理という考え方にしていきたいということをも、今、行っています。

教育研究院は、具体的には人文社会科学系、自然科学系、医歯学系の三つの学系から構成されていて、この三つがだいたい300人ずつぐらいで、ほぼバランスのとれた数になっています（P82資料3-2-㉒）。

人文社会教育科学系は、人文学部、法学部、経済学部、教育人間科学部に対して担当教員を派遣しています。自然科学系は、理学部、農学部、工学部の担当教員を出し、医歯学系は、医学部、歯学部の担当教育を出すということになっています。つまり、教育組織としての学部と、教員の人事組織としての教育研究院がそれぞれ独立に存在するという制度に移っています。

教員はすべて教育研究院に所属へ

従来は学生と教員が学部において、この中で自足するかたちで教育がおこなわれてきたわけですが、新たな制度では少し違ってきます。教員は教育研究院において、全学教育機構を通して授業科目を全学に対して開くということになりました。教員には担当する教育組織がありますから、担当教育組織のプログラムを構築し、運営し、改善するというのは、教員の仕事として当然あるわけです。それと同時に、先ほどアドバイザー制等の話もありましたけれども、履修であるとか、その他もろもろの指導というものも担当組織に所属の学生について行います。教員は仕事を、授業をするということは全学向け、カリキュラムを作ることと履修指導というのは担当学部、もしくは大学院の学生向けという、意識分けして行うことが要求されるということになります。

その三つの仕事を教員の立場で整理して表現したのがこの図です (P83資料3-2-⑳)。授業科目担当者としては、授業を原則として、全学的位置づけをもって行います (P83資料3-2-㉑)。つまり、私で言えば、自然環境科学科の学生のために授業をしているのではなくて、私は生物分野で機能形態学という授業をしています、それは全学的な位置づけで授業している。だから、どういう学生が聴いてもかまわないということです。その代わり、内容だとか到達目標等については、きちんと明示する必要があるということです。

教育プログラム担当者としては、あとでもお話ししますが、主専攻プログラムと、場合によっては、副専攻プログラムを担当します (P84資料3-2-㉒)。私の場合は理学自然環境科学科のカリキュラムの構築と維持について責任を持つということになります。学生の指導は、アドバイザー制、オフィスアワー、それからスタディスキルズ等について、担当している学生集団(私の場合は自然環境科学所属の学生)に対して、学生指導をおこなうということになります (P84資料3-2-㉓)。

全学教育機構で分野・水準コードを表示

今度は組織面から見るとどうなるかというと、三つの組織がかかわってきます (P85資料3-2-㉔)。教育組織としての学部。学部は組織として何をするかというと、教育プログラムを構築し、運営し、改善し、そのために

必要な授業科目の開設を、全学教育機構に要請する。さらに学生の履修面と厚生面、それからキャリア形成等の指導を行うというのが学部責任となります。

全学教育機構というものをつくったわけですが、全学で開設する授業科目を分野・水準表示を付けて開示するというのが、機構の一番大きな仕事になります。そのために、授業担当者の派遣、つまり学部から必要だと開設要請のあった授業科目について、授業担当者の派遣を、教育研究院に要請するということです。

教育研究院のほうは授業担当者を決定して派遣し、さらに、教育プログラム担当教員、つまり学部学科の担当教員を派遣します。三者の関係を模式図にすればこのようになります（P85資料3-2-⑳）。

科目区分を撤廃したのですが、これにはいろいろな意味合いがあらうかと思えます（P86資料3-2-㉑）。つまり、教養と専門の区分については「不毛な」というのは言い過ぎかもしれませんが、いろいろな議論があったのですが、それが本当に実のある議論だったかという点、多少微妙な気がしております（P86資料3-2-㉒）。プログラムの二元制を打破したいのですが、ではプログラムの全授業科目をプログラムの到達目標に対して一つ一つすべてカスタマイズして開設することが可能か？それはプログラムの観点からは理想なのですが、反面、カスタマイズの名のもとに、中身と題目が乖離した授業がおこなわれるというようなことも必ずしも否定しきれない現実があります。そういう意味で、「学問の祭壇」の前で正当性が担保された授業科目でプログラムを構築するかたちがいいのではないかということで、全授業科目を全学向けとして分野水準表示を付けるということにしました。

従来、A学部、B学部、C学部の専門科目もありましたし、新潟大学ではいわゆる全学共通科目という名前の教養科目があったわけですが、それを全部いったん一括のものとししました（P87資料3-2-㉓）。

分野コードは科研費の分野分科に準拠

そのように全授業科目を把握したうえで、それに対して分野と水準を示すコードを付けました。分野・水準コードを付ける意味としては、もちろん一つは、学生に対して、その授業がどういう学問分野のどういう水準のものか

を示すということがあります (P87資料3-2-⑳)。さらに、授業担当教員に対して授業科目は属人的なものでなくて、内容に関してある種の「公共性」の確保というものが要請されているということを意識させるという面でも意味があると思います。

分野は、これは教育プログラムの区分ではなく、あくまで学問分野の区分を示します。水準は内容の積み重ねを意識して付けます。

これが現行の分野コードと水準コードです (P88資料3-2-㉑)。医学、歯科学の部分は今後、もう少し区分することになります。科研費の分野分科に準拠してつくりましたが、これは何も科研費が全知全能だと思っているわけではありません。つまり、教育プログラムにはよらないということ、学内的な議論としてご納得いただくには、何らかの“黄門の印籠”のようなものが、そういう意味で科研費の分科を基礎として作ってあります。もちろん学内的な必要に応じた調整はしております。

5段階による水準コードを設定

それから、水準については1から5まで付けておりますけれども、そのうちの大学としては3、4、5の3段階としました (P88資料3-2-㉒)。つまり、通常の大学の基礎的水準、専門の中核的水準、それから発展的内容の科目で、大学院との接続水準と、かなりおおざっぱですが三つにしました。そして、1、2というのは、2というのはいわゆるリメディアル的な部分というニュアンスでつくり、1はちょっと意味合いが違うのですが、導入的な内容のものを示します。こういう水準制がいいかどうかというのは、今後再検討する必要があると思っておりますが、とりあえずこのように付けたということです。

それから、10の桁があるのですが、10の桁は、すべての学生を受け入れることが可能な科目は0として、例えば03とか04とか05と付けました。実験・実習科目等のように、いくら原則が全科目全学学生対象と言っても、授業実施上、特定学生集団に限らざるを得ないものについては1を付けて、13、14というようなかたちにしました。

では、具体的にどうなっているか。例えば、従来の農学部専門科目等について、3、4、5が付いた科目がどれくらいあるかということ、だいたいこ

んな感じですが（P89資料3-2-③⑤）。では、全学で見ると、この図の通りですが、言うまでもなくまだいろいろな課題があります（P89資料3-2-③⑥）。これは数年かかって、こういうことをモニターしながら適正にしていこうと思っています。

分野コードの3、4、5の水準の授業を聴いている学生が平均すると何年生かを調べてみました（P90資料3-2-③⑦）。そうすると、3、4、5の科目について、それぞれ2.08、2.93、3.38と上がっていきますから、まあまあ水準の付け方も今のところめっちゃやではないとは言えます。ただ、個々に言えばいろいろ問題があり、それを今、調整しつつある段階です。

電算システムで分野というところで生物学、コードとしては57になりますけれども、それで検索しますと（P90資料3-2-③⑧）、例えば農学部関係で植物遺伝学、遺伝学、基礎動物遺伝学のような授業が出てきますし、教育人間科学部の生物学実験、昆虫学演習も出てきますし、理学部のこういうものも出てきます（P91資料3-2-③⑨, ④⑩）。このようなことを行うことで、学生は全学で開設されている全授業科目から選択した授業科目を学習することが、可能になります。

副専攻プログラムでは到達目標を明示

次にお話したいのは、副専攻プログラムです（P92資料3-2-④⑪, ④⑫）。本来、こういうお話をしますと、聴いていただく人からどう言われるかというと、「それで主専攻は？」と問われます。それは当然の疑問であると承知の上で、主専攻プログラム化に取り組む前に、全学の授業科目を活用した副専攻を始めたというのが、新潟大学がやったことです。つまり、従来、教養科目というものがあって、広くいろいろなことを学びましょうということなのですが、自分の所属する専門分野の外で何らかの体系性のある学習をすることを奨励するというには意味があるだろうという観点で、副専攻制度を立ち上げました。現在20の副専攻プログラムが運用中です（P93資料3-2-④⑬）。

副専攻プログラムは、プログラム案を全学的に募集することで立ち上げました（P93資料3-2-④⑭）。まず副専攻委員会をつくります。これはある種のボランティアな組織です。副専攻プログラムを構築する意志のある方が

副専攻委員会を構成し、プログラムを作成して申請、一定の規格にはまっているということが認められればそれを認可して、副専攻プログラムとして公示・運用しましょうという制度です。

副専攻プログラムの学修について、到達目標を明示して授業リストをつかって、認定条件を設定して、それで認定審査をするということを行います。その20プログラムのうち、平成16年度に導入の6プログラムについては平成17年度に認定受付をしました。その結果、17名の学生が認定申請をしてきました。平成17年度の卒業式では、卒業免状の授与に加えてこの17名に対しては学長が別途副専攻証書を授与し、全学的なかたちで認定しました。

プログラムの概要、到達目標と認定条件、副専攻委員会メンバー教員名授業科目リスト等を含むパンフレットを作って学生に配布しています（P94資料3-2-④5）。

今までやったことはおおそ以上のようなことになります。学部、学科、課程のカリキュラムから主専攻プログラムへということで、これまでのお話をお聴きになった先生方としては、副専攻がありながら、では主専攻プログラムはどうかということが、当然疑問になると思います（P94資料3-2-④6）。われわれもそれが一番の課題だと思っております。授業科目を公共化して全学のものとして、ここまでやった以上は、主専攻プログラム化に是非取り組みたいと思っています（P95資料3-2-④7）。そのプロセスのなかで従来の学部、学科の教育体制というものの弊害を払拭したいと考えています。そのときのキーワードは、先ほどICUの先生のお話にもありましたように、おそらくラーニング・ゴールを明示する。そしてラーニング・ゴールを基礎としたうえでの授業科目というものを編成して、個々の授業科目の体系性を明示し、その中での一種の履修モデルみたいなものを提示しながらやっていくことになるだろうと思われれます（P95資料3-2-④8）。

新潟大学としてこれをいつできるかということは多少問題ですが、今作業をしております、早ければ平成20年度、もしくは平成21年度から、到達目標ベースの主専攻プログラムへの移行というものを、ぜひ達成したいと思っています。

足立 ありがとうございます。

第二部 パネルディスカッション

立教でも教学改革が今後の課題

足立 それでは第二部のほうにこのまま入らせていただきたいと思いますので、シンポジストの先生、それから本学の前田先生、大野先生、菊地先生、ご登壇ください。

ここでご登壇いただいた先生方をご紹介します。向かって右手から、第一部でご発表いただいた芝井先生、日比谷先生、そ

れから濱口先生です。そしてそのお隣が本学の文学部教授の前田一男先生、当センター副センター長の大野久先生です。そして司会をご担当いただきますのは、総長補佐の菊地進先生です。では菊地先生、どうぞよろしく申し上げます。

菊地 総長補佐の菊地でございます。芝井先生、日比谷先生、濱口先生、どうもありがとうございました。これからディスカッションに移らせていただきます。先ほどの大橋総長のご挨拶にもありましたが、立教大学では総合発展計画の基本計画を総長より提示し、これから全学討議を経て教学改革に取り組んでいく、こういう段階でございます。本日の日比谷先生のお話にございました教学改革本部や副学長、こういった制度は立教大学ではまだ取り入れておりませんで、今後の課題になっております。



パネルディスカッション風景



菊地 進氏

いずれのご講演も30分という短い時間しかとれず申しわけございませんでした。いずれも1時間半フルにお聞きしたい内容でありました。

お話をうかがっていて、おおっと耳をそばだてるようなお話がたくさんあったのではないかと思います。教員採用にあたって前任者の後任人事の形はとらない、カリキュラム改革について上位年次適用をする、2年次の専修の選択で95パーセントが第一希望に決まっていく、それから世界基準のICU、ダブルメジャー、



前田一男氏

メジャー・マイナー、問題解決型メジャー、科目区分の撤廃、分野水準表示、全学教育機構等、参考となるキーワードもたくさんあったように思います。

質問をなさりたい方が多数いらっしゃると思いますが、時間もあまりありませんので、共通してお聞きしたい点について、あらかじめ代表質問の形で出していただき、その上で会場からのご質問を受けたいと思います。それでは、まず前田先生からコメントと質問をお願いいたします。

学問的な discipline と新専修の関わりは

前田 立教大学文学部の前田と申します。よろしく申し上げます。今日は、たくさんの方においでいただきありがとうございます。ただ、学内の方が少ない。文学部改革をあれだけやったのに、文学部の教員がお一人でしょうか。それはある意味しょうがないのかもしれないし、あるいはしょうがあるのかもしれませんが、この事態を一方でどう考えていくかというようなことも、ひとつの課題かなあという気がいたします。

大学改革がどうなっていくのかというのは、これからの大きな課題になっていくと思うのですが、入試改革（アドミッション・ポリシー）、カリキュラム改革（カリキュラム・ポリシー）と、あと学位の質（ディプロマ・ポリシー）といいますか、おそらくこの三つのポリシーというか方針というもの

を、どう社会的にしっかりと説明していけるか。入試とカリキュラムと学位というものを通じて、大学自身がどう教育改革をしていけるかが課題だと考えておりました、そういう観点から、今日のお話も聞かせていただきました。

実は私、芝井先生とは2003年の9月にお目にかかっています。私は、文学部長をしておりましたときに、非常に苦しんでおりました、文学部の改革の一つの示唆を与えていただけるのではないかと想着て、2003年の9月に関西大学に伺ったことがあります。今お話されたように、非常に斬新でうらやましいなあと思うところがありました。

一つは、執行部体制がしっかりしているのです。それで、例えば教育学科の先生が、高大の連携とか学校インターンシップというのをどんどんやっていたらいいのです。そういう役割分担をもった執行部体制というものが大切だなと思いました。あともう一つは、文学部改革はやります、その代わり教員定数とコマ数はこのままにしておいてくださいという合意を、あらかじめ学長ととられたそうです。その点はうらやましいなと思いました。

立教の文学部改革は、大学全体のレベルを上げていくということで、「教学条件」のなかで改革をしていこうということになっていましたので、そのところはちょっと違うかなあと思いました。けれども、後任人事というのを学科の既得権ではなく今後必要な領域のコンペで考えるのだとか、そういう斬新なお話をいろいろ聞かせていただきました。

立教の文学部も、2006年度から従来の8学科から4学科8専修になりました。文学部改革のことをお話しするのは、ここでの本筋ではありませんけれども、ポイントというか、私が学部長をしていた時の議論で特徴的だったのは、学問論をしたということですね。人文学にとって、学部改革というものを考えていくときのメインにするところは何かという、その議論を徹底的にやったと思います。

それは結局、学問的な discipline というのを、やはり守ろうという、そういうところにある意味で落ち着いたのではないか。ただ、それをまだ十分に教育プログラムに落としきれなかったのではないか。そのような議論の仕方がいいのか悪いのかという評価は、これからしていかなければいけないのですけれども、むしろしっかりと学問論を持つことが、柔軟にこれからの時代に対応できるような基礎になるのではないか、改革を急ぐということの拙速

性みたいなことについて、これもどういう改革かということの質によるのですけれども、非常に議論が分かれました。一見おとなしい文学部改革になったと学内から評価されていますけれども、そのなかでの学問論の議論は非常に深化したと考えています。これは必ずしも言い訳ではなくて。

そういう点で、芝井先生にいくつかご質問があるのですけれども、一つはやはり伝統的な学問的な discipline と新専修のかかわりです。八つの学科が横滑りしたとおっしゃっていましたが、今後新しく新専修がつくられたり、あるいはなくなったりするということが現実的に起こってくるのでしょうか。もしそのようにあるとすれば、その原理みたいなことというのは、どのへんにあるのだろうかというのが一つです。

あと、1学科制にして教員意識は変わったという、非常にやはり勇気づけられるようなご発言があったのですが、変わったというときの、何がどのように変わって、そのときの要因というのは一番何が大きかったのだろうか。それはカリキュラムのなかで意識が変わったのか、人事というもののなかで変わったのか、教員意識の変容の中身というのをもう少し教えていただきたいということが一つ。

三番目ですが、ご説明はあまりなかったのですが、関大文学部はインターディパートメントというコースを持っていらっしゃいます。どこの専修にも属さずに、自由に単位を取っていくと。最初はそのインターディパートメントというのが、カッコ付きですけれども、「落ちこぼれ」の学生が取るのではないかと思っていたところが、逆に優秀な学生がどんどん集まってきたと。

この傾向は、面白いと思うのです。文学部の比較文芸・思想コースというのを実験的にやりましたけれども、最初は、独仏の外国語にうまくついていけない学生が来るのではないかと思っていたところが、意外と自分で問題意識がある学生が集まってきた。つまり、選び方、決め方という学生の能力を、われわれ自身のカリキュラムのなかで持っているかどうかという、その問題提起なのではないかと思うのです。このインターディパートメントについて、学生の選ぶ力、決める力、学ぶ力とのかかわりで、何かご経験があれば教えていただきたいということがございます。関西大学については、そのことでございます。

どんな力がつければラーニング・ゴールか

ICUについても、今日のご発表を聞いて、素朴な疑問を抱きました。つまり、これだけ満足度が高い大学のなかで、日本でのリベラルアーツの最高峰の大学のなかで、なぜ教育改革が必要なのかという素朴な疑問であります。最初に申しあげました入試改革というところの問題と、ひょっとしたらかわっているのか、とも思います。ちょうど先週の月曜日、前学長の絹川正吉先生とある会合でお目にかかって、「立教の文学部は、受験者数は減っているのですか」と言われて、「減り気味ですけども、そんなには大きく減っていません」と申しあげると、「そうしたら、あまり周りから文句言われる筋合いがないのにね」と、それはお茶飲み話ですが、そんな話をさせていただいていました。

聞くとところによると、ICUも大学入試センターに参画されたとか。ICUというのは、やはりICUらしい入試が特徴ですよ。ICUを第一志望にしたのも、ICUの試験勉強しかできないというところに特徴があったところが、センター入試で新しい質の学び方をしてきた学生を受け入れるというようなことを、どう引き受けるかという課題から、あるいは新しいカリキュラムの見直しということにつながったのかどうかという、そこのところなのですね。

私、立教大学でも、同じ1年生といってもだいふんと違うのですよ。偏差値ということも、もうあまり使いたくありませんけれども、同じ学部に入ってくる学生の「学力差」というのは、かなりあるのではないのでしょうか。特に私の実感としては、書けなくなってきたなど。立教の学生は、おとなしくて発言はあまりしないけれども、書かせるとけっこう深く考えている内容が書けたのに、もちろんそういう学生もいるのですけれども、書けない学生が多くなってきたという実感があります。導入教育をどう考えていくかということも含めて、新しい質の学び方をしてきた新入生のとらえ方が、入試制度とかかわっているのかどうかということがご質問の一つです。

2つ目が、約30のメジャーというのは、これは教育カリキュラムそのものだと思うのです。だとするとその30の決め方、つくられ方です。例えば「教育」のほうを見てみますと、教育、メディア、社会という領域ですが、そのコンセプトというのがどのように成り立っているのだろうかということ

です。6学科から30のメジャーになるという過程で、ある種の合理性があるかと思うのですが、そのメジャーのつくられ方というのをちょっとお聞きしたいと思います。

3つ目が、ラーニング・ゴールという、それこそ学士課程教育のゴールを明確に明示しましょうというお話は印象的でした。こういう教育をしたから、こういう力がつきましたよということをちゃんと社会に示さなければいけないという責任が問われつつあります。そのときにICUは、「世界基準。ICU」、これはおそらく理工系のひとつのモデルなんかを参考にされているのかもしれませんが、そのような表現のなかに、どういう書き方をゴールとして書かれるのか。例えば具体的に TOEFL で何点という書き方もあるでしょうし、どういう力がつけば、ここの学士課程を卒業した証明になるのかという、その書き方について、何かお考えや工夫されているところがあれば、教えていただきたいというのがございます。

新潟大学も、本当にいろいろと教育プログラムを開発されていて、熱心ですごいなあと思いました。その点では、カリキュラム・ポリシーをどう考えていくかということだと思います。それはおそらく講座制とか学科目制が今度、大学設置基準からなくなりましたので、いっそう大胆にやれるかと思うのですが、その場合、どこかにモデルというようなものがあつたのでしょうか。例えば筑波大学なども一つ前のモデルですけれども、新たなモデルというのを自分の大学で改めてつくられたのか、どこかのモデルを批判的に参考にされたのかという、一つのモデルというものについてお尋ねしたいということがございます。

二番目は、プログラムについての理念とか、編成の原理とか、実証方法とか、あるいはやってからの評価というものがあると思います。いろいろなレベルのうちで、どここのところが一番難しいとお考えだろうかということも、ちょっとお尋ねをしてみたいと思っています。

雑ぱくで飛び飛びの質問になってしまい申し訳ないのですが、私の質問とさせていただきます。

立教では他学部他学科聴講の制度が充実

菊地 ありがとうございます。続いて大野先生、お願いいたします。

大野 たいへん興味深い刺激的なお話をたくさんいただいて、非常に参考になりました。司会の菊地先生がポイントをいろいろまとめてくださったので、参考になる部分というのはあえて繰り返しませんけれども、やはり大学のカリキュラム編成は、こちらの方向に行くなという実感を持ちました。立教大学もリベラルアーツを標榜している大学ですので、やはり専門性ある教養人の養成、育成として、カリキュラムの柔軟化ということは必要なのだろうと考えました。



大野 久氏

それで、お話にすごく賛意、賛同を示すところなのでありますが、一方でとても心配というのが本音のところ、いろいろなことがうまくいくのだろうかと思う部分があります。立教大学にそれを導入した場合という具体的なことを考えて、たくさんお聞きしたいことが出てきました。

その話をする前に、そのことについて立教大学の宣伝になりますが、すこしお話ししたいと思います。

まず、立教大学は非常に他学部他学科聴講の制度が充実しています。ちなみに私は心理学科の専門科目である心理学特殊講義の「青年期の自我」という科目を担当しているのですが、受講生の半分は心理学科の学生で、半分は他学部他学科なのです。だから、立教大学は学部学科の壁が低いなとあらためて思ったところであります。私、立教に来てまだ10年なのですけれども、全カリの総合Bという科目があって、学部学科を越えて複数の教員がリレー方式で授業をするという学際的な科目を昔からあります。なかなかおもしろい試みだなと思っておりました。

それから最近、いろいろな学部が、理学部の「理学とキャリア」とか、文学部もそのようなキャリア教育の科目を始めています。キャリアコーディネーターや、私は心理学者なのですけれども、理学部から「一コマ担当してく

ださい」と依頼されることもあり、学部の壁を越えての教員の行き来があります。

それは立教大学のわれわれがもっと再認識しなくてはいけないところなのかと思います。私の所属している教育開発・支援センターでは、学内外の情報をなるべく共有しましょうという活動をしています。調べていてわかることは、隣の学部学科で何をやっているかさえすこしもわからないのですね。したがって、よいことはなるべく共有しましょうという方針で、情報収集と開示をしているのですけれども、やればやるほどいろいろなことが出てきて、「立教に10年勤めていたけれども、そんなことは知りませんでした」の連続なのです。もっときちんと把握して、情報発信しなくてはいけないなと思ったයි。

2年次で自らの目標を決められるのか

それでは、話を本筋に戻します。前田先生に理念的なところを押さえていただいたので、具体的な話で、私が不安というか疑問に思ったことをいくつかかいます。私は青年期を研究している心理学者なので、現代青年の特徴をいつも見ているのですけれども、現代青年には「自分で決められない。指示待ち、決定の先送りする」という特徴があります。決定をどんどん先送りすることが、今のニート問題などの原因にあるのですけれども、自分の人生について決定をしない。あいまいなまま、どこまでも行くという傾向があります。

そうすると、カリキュラムを自由化して、1年、2年で基礎科目を学んで、「さあ2年生の終わりに決めなさい」といっても、学生は自らの目標を決めることができるのかなということが不安です。今までは、大学に入るときに学科を選ぶことは、かなりの学生の重大問題で、「どこに行ったらいいだろう」と、かなり真剣に考えて決めたのが、「とりあえず何々大学に入りましょう、決めるのは2年先だから」ということで、大丈夫なのかなと、心理学者としてすごく素朴に疑問に思います。

お話のなかで、ガイダンスを強化するとうかがいましたが、そのことに対してなにか、あまり表だって言えないようなご配慮などがあったら教えていただきたいと思いました。

それから二番目の問題として、立教大学も「専門性ある教養人の養成」という方向性を持って、リベラルアーツを推し進めています。この方向だと教養人の部分はとても充実していくと思うのですが、専門性の部分をどうレベルを保証していくのだろうと思います。先ほど申しあげたように、2年まで決めない、メジャー、マイナーもある、ダブルメジャーもあるということになると、学生はますます忙しくなるわけで、しかもそれを後半の2年で全部やるとなると、今までの専門性の水準をどう維持するのだろうという疑問です。ラーニング・ゴールを明示することは、本当にいいお話だと思います。われわれが導入しても、そのようにしていかななくてはいけないのだろうと思いますが、今までの専門性のレベルを維持する工夫があれば、ぜひ、ラーニング・ゴール以外のことで教えていただけるとありがたいと思います。

それから、すごく具体的な話になるのですが、やはり、特定の教員に学生の希望が集中しないかというのが心配なのです。ある先生のキャパシティを超えたときに学生を振り分けるとなると、結局、学内での不本意学生をつくってしまうのではないかと。関西大学の芝井先生のお話で、「95パーセントは大丈夫」という話をうかがって、「ああ、そういうものかな」と思っているのですが、一方でそのシステムが続いていくと、今の若者は流されやすいですから、「あそこの先生は人気があるよ」とか言って、どっと学生が集まってしまう現象が起きるのではないかと、それをどうさばくのだろうということに対するお考えをうかがいたいと思います。

それから、私は現在教職課程に所属していて、授業配当をする上で全学部の学科の科目展開と教職科目の科目がバッティングするのがすごく頭の痛い問題です。そのことから考えると、メジャーとか主専攻、副専攻でいろいろな科目を展開するときに、授業配当をどうするのだろうと、学生が取りたい授業がバッティングしていて取れないというようなことが発生した場合、どうするのだろうと、とても気になったしだいがあります。

あと、少人数授業を続けていくための財政的基盤はどうしているのですかとお聞きしたいと思います。立教大学は人件費比率でものすごく苦労しているのですが、具体的な問題について、一つでも二つでも示唆をいただければ幸いに思います。

テーマ・プロジェクトから新専修が誕生

菊地 時間があまりありませんので、私のほうで質問点の繰り返しはいたしません。まず、芝井先生から、お二人へのご回答をいただけますでしょうか。

芝井 それではなるべく手短に。答弁漏れがあるかもわかりませんが。また、もしどうしてもということでしたら、ご指示いただけましたらと思います。

前田先生からのご質問ですけれども、一つはどうなのでしょう、伝統的な discipline が枯れていくとか、そのなかでどのように新専修をつくっていくのかという、その辺の原理はどうなっているのかということなのですが、なかなかこれは難しい問題なのですが、多彩な discipline と活発なプロジェクトですので、多彩な discipline がなくなってしまうと話にならないわけです。特に今、文学部系統でいいますと英語帝国主義のようなところがありまして、英語以外の外国語は少し旗色が悪いという状況があります。そこをどうやって手当てするのかというのは、今回の移行のときの、特に自由に希望どおり選ぶときのポイントになっていまして、移行の前に当然、入試制度のなかで位置付けをはっきりさせることからはじめた。

特に第二外国語、未履修のかたちの、高校時代では多くの人間がやっていない外国語に関しては、志望の固いコアとなる学生の確保のために、入試制度で工夫をするということを約束しました。具体的には AO 入試ですね。それから推薦、それからある程度ターゲットを絞ったかたちの入試方法です。レジュメの最後のところにスペシャリスト・プログラムというのがありますが、これは明らかにそれをかなり意識した制度です。特に伝統的な discipline で、多少流行に流されて、現在は旗色が悪いところですね。そこについては、学生の確保を優先し、持ちこたえるだけ持ちこたえたいというのが、



芝井敬司氏

私どもの移行の基本的な原理です。

それから、新専修の立ち上げの方法ですが、さきほどお話したように、文学部を今後こういうかたちで展開するよということを4点にわたって明示し、教員間で合意を得たわけです。例えば文字以外のものに関して、特に表象に関して分析するような専修をきちんと開いていこうとか、あるいは文化政策にかかわるような部分を人文学としてもきちんと持とうとか、いろいろな合意をつくりました。そして、例外もありますが、その合意に基づいて新専修を設置していったわけです。そのことが学部の中で議論し、最後教授会で決めるときの決定的な強みのある追い風になりました。教授会の前に文学部計画会議という組織で投票をしたわけですが、その投票をするときも、それは決めた方針に合致した提案だということで票を集めるということができました。

もう一つの工夫としては、私ども、今日お話ししませんでした。テーマ・プロジェクトというのをやっております。これはなかなか、ほかにないので、なかなかうまく言えないのですが、簡単に言うと、専修の所属はそのままに、別のある特定テーマで卒論を書くことを認めるという仕組みです。だから、メジャーでもマイナーでもありません。メジャーのようなマイナーで、マイナーのようなメジャー。

つまり卒論を書くという意味ではメジャーです。ただ、単位数でいうと、かなりマイナーです。要は自分の所属している専修で書かなくていいという、そういう制度なのですが、それは10人から15人で募集をして、そこで学生が育ち、さらに多くの学生が興味を持つということがわかれば、新専修の提案をしてもらおうという、だいたいそんな方法をとりました。

具体的に言うと、映像文化論なんかは、明らかにそういうかたちでできた専修です。最初に仏文の教員がフランス映画のわかる教員を採りたいという提案をしまして、ポストをつくりました。来た教員が、フランス映画論でテーマ・プロジェクトをしたいと言い、そこにわっと学生が集まりました。その次の年は中国の映画がわかる教員が欲しいということになり、新規人事の募集に手を挙げました。そして、また中国映画のポストを勝ち取ったわけですね。そこで、意気揚々と次の年に、学生30人の受け入れ規模で新専修を設置したい、ハリウッド映画の専門家も呼びたいというので、公募人事を実施

し、見事、専修ができたわけです。これは、自分の専修以外の分野でも5人教員が集まると人事提案ができるというシステムをとっているからで、そういうダイナミズムが一定程度、中に組み込まれているということです。

学生が元気になることが一番の成果

それから何が変わったかというご質問がありまして、やはり学生が元気になることですね。そうすると教員がよかったなあと思います。しんどい思いをしたし、場合によってはポストまで削ったわけですが、学生はやはり元気になってくれて、そこで自分の興味に従って、生き生きと学んでいる姿を見ることができました。このことが教員にとって、ポストが減らされるなどのうらみは残ることはあっても、それなりに納得のいく結果であった。それが私の偽らざる印象です。

それと、もう一つすごく大きいのは、学科時代よりも教員同士の共同作業がかなり増えてまいりました。例えばこういう1年次の共通科目はいろいろな専修の教員が集まってやりますので、そういう共同作業が、いわゆる所属組織を越えたかたちで行われることで、いろいろな共通理解を得ることができ、すごく有用であったように思います。

それから、インターディパートメントについてのご質問がありましたが、そのとおりでして、私どもが実はモデルにしたのは早稲田大学の人文専修という専修です。ここと同じような方法で取り組んだわけです。やはり優秀な学生が来ました。学科時代は、「こんなはずではなかった」「自分が学びたいこととは違う」とふさぎこんでしまって、場合によると大学に出て来なくなるような学生もいました。ただ、そういう学生がインターディパートメントに来まして生き返りました。これはすごく意味がある。親御さんから、「ありがとうございます。自分の息子、あるいは娘は、あのままだったら卒業できなかったかもしれないけれども、生き返りました。そういう選択肢を与えていただいて、ほんとうに感謝しています」というお話をいただいたことを覚えています。

インターディパートメントは、実は1998年くらいから準備作業をはじめて、実質的にフルにできたのが2000年でして、関大の文では副専攻制度自体は、その年から取り入れています。ただし小さな副専攻ですので、10名から20名

くらいで動かしておりました。

それからすみません、あまり長く時間をとったらだめですが、大野先生からのご質問なのですが、たいへん大事なご指摘で、自分で決められない指示待ちの、決定先送りの学生が多いなかで自由にするというのは、いったいどういうことなのかということなのですが、そういう危惧、懸念がある。ただ、これはどれだけ学生とうまく向き合えるかによって、生きるか生きないかが決まる。だからそういう意味では、ものすごいチャレンジなのですね、私たちにとっても。少し間違えると、ある面で手抜きをしてしまうと、まさにおっしゃるようなことが起こると思います。でも、簡単に言いますと、決まりきった定食を出すのではなくて、メニューをどれだけ与えられるかという、われわれの、教員のほうの力が、あるいはガイダンスも、モデルカリキュラムもそうなのですが、それが求められていると思います。

それから入学時に専門を決めるやり方ですが、これは、私どもは初めからやめましょうという話をしました。すなわち入学時というのは、17歳か18歳の高校生が、なにもわからずにパンフレットや、あるいはどこからかの情報や偏差値で進路を決めるわけですから、それだけはやめたい。それはやめたほうがいだろうと。まさかパンフレットで自分の学びを決めるわけではないだろうということです。きちんとお試しをしてもらってから、納得して決めてくださいと、それはすごく大事な部分だと思っております。

あと、いくつかあるのですが、専門性の確保については、先ほど申しあげましたように、私どもの大学では専門教育が、やはり一部大学院に移った部分があります。それは、私どもはICUのようにうまくはリベラルアーツ教育ができていないのですが、やはりこういうことを通じて、リベラルアーツ教育の部分の部分を少し拡充しながら、専門性に関しては、やはり大学院に移さざるをえないという、ある面では苦渋なのですが、その決断はしております。ただ、まだ4年間で卒業し就職していくことが多数派である以上、旗を簡単に降ろそうとは思っていません。そういうちょっとあいまいなかたちで対応しておりますが、充分ではないことを意識しております。私からは以上です。ありがとうございます。

学びの筋道をきちんとつけさせたい

菊地 ありがとうございます。続いて日比谷先生、お願いいたします。

日比谷 いろいろご質問いただきましてありがとうございます。最初にセンター試験利用方式の入試の導入の話をされましたが、これを決めるときにも大激論がありまして、あのときはすごかったかと、今、思い出しております。それで、今、時間割のバッティングはどうするのかというご質問がありましたけれども、これが目下のたいへんな頭痛の種で



日比谷潤子氏

して、私どもはまだ新しい体制になっておりませんが、2008年の4月になって、その人たちが2年生の終わりになったらどうやって決めるのかとか、振り分けをどうするというような問題がそこで起こるわけで、過去、現在、未来のすべての問題についてご質問いただきまして、ちょっと暗い気分になってきているのですが、そうは言っていられないので、ご質問にそれぞれお答えしたいと思います。

まず、おかげさまでICUは、たいへんに学生満足度が高いので、こういうところにまいますと、リベラルアーツ教育が成功しているのになぜ改革をする必要があるのかというようなことをおっしゃってくださって、けっこういい気分になって帰れることが多いのです。そういう意味では、ICUという学校は、外人受けはすごくいい。しかし、世間一般でICUの話をする、「集中治療室のことですか?」とまず言われるわけです。どこだとは申せませんが、あるところでの調査結果を見たら、なにかもう本当に絶望的な気分にならざるをえないような知名度の低さを痛感させられたことがございます。

センター試験利用方式の入試を導入したことも、いろいろな理由がありますがすけれども、一つはこういう全国的な試験に一部ですけれども参入することによって、全国的な知名度を上げることができると考えたからでした。私ど

もは、もちろん世界中から来てほしいのですが、国内では首都圏のごく限られた高校からだけ来てもらっているのが現状で、やはり全国のすべての都道府県から、それなりの学力の人たちにバランスよく来てもらいたい。あわせて、特別入試というのも数年前からやっております、入り口の多様化を図るということもあったと思います。

それで、なぜ改革かといいますと、6学科を設けることによって逆に受験生からは見えづらくなっていたのが、1学科制にすることによって、学科を超えて様々な学問分野で自由に学べることができるリベラルアーツの良さがわかってもらいやすくなると考えたからです。

改革を実施するもう一つの理由は、学生たちに、専門的な勉強につながる学びの筋道をきちんとつけさせたいと考えたからです。ベネッセの満足度調査というのは、ご覧になるとよくわかりになると思いますが、その内容を構成している項目がいくつもございます。その中で毎年評価が悪いのが、「専門的な知識が得られる」という項目です。

それはある意味で、リベラルアーツの大学であるということの宿命といえは宿命なのですけれども、確かにそう言われてみると、思い当たる事実がございます。それは、ローグレード、これを略して学生はローグレと呼んでいきますけれども、このローグレの学生が結構多いという事実です。ローグレというのは、一定レベル以上のGPAを数学期間続けて達成できない学生のことです。実際は、そのような学生を出さないためにも、アドヴァイザーがきちんとアドヴァイスをしているはずなのですけれども、学習の記録を見ますと、こんなふうに取りっていたら、それはだめだよというような人が、残念ながらけっこうたくさん出てしまうのです。

大学としても、なぜそのような成績になったのかを聞き、奮起を促すために、最初は副学部長、2回目は学部長が、対象となる学生と面談をします。それでも改善されずに、その状態が3学期間繰り返されると、「スリーアウト」という学内用語があるのですが、退学という処分が下されます。

そのような学生をなるべく減らすためにも、デパートメント制をきちんと敷いて、それぞれのメジャーごとに、もっとはっきりと学びの道筋をつけて、早期の段階から学生のモチベーションを上げてやりたいということも、今回の改革の一つの大きな動機でした。

時代のニーズに合わせてメジャーを改廃

さて、つぎに30のメジャーがどのように決定されていったかということですが、すけれども、実は今の6学科が最小の単位ではありませんで、それぞれの学科ごとに、さらに下位の専攻分野というものがござります。例えば社会科学科だと、経済学・経営学とか社会学・人類学とか歴史学とかいうような、下位のくくりがござります。今回の改革では、多少新しい組み合わせもできましたけれども、基本的には今の学科の下にある専攻分野が、新しく16のデパートメントになったわけです。

それでこれまでは、社会科学科に経済学・経営学というのが専攻分野としてありまして、一方、あとからできた国際関係学科にも国際経済学、国際経営学があるという、ちょっとおかしな状況もありました。もちろん社会科学科でやっているのは国際的ではないのかという、そんなことは全然ありません。これまでもそういう問題を解消するために、一部乗り入れたようなかたちで改編はいたしました。今度の改革で、同じような分野の教員を同じデパートメントに集め、それぞれのメジャーは、各デパートメントからこういうものを出したいということまでできていったのが、今の30を超えるメジャーということになります。

それで今、組織についてもいろいろと考えているところでして、新しく考える組織の運営方法のもとで、メジャーの改廃が一定の手続きを経てできるようにしたいと考えています。つまり、あまり時代にそぐわなくなった、あるいは学生が集まらないところはやめ、新しい必要に応じて別のメジャーを立てる、あるいは新しい組み合わせをつくるというようなことが可能なシステムをこれからつくろうと思っております。

つぎに、ラーニング・ゴールの示し方ですが、これは、TOEFL 何点というような定量的なものではありません。すべて文章にして、「こういう分野に来たら、こういう視野を持って、こういうことができるようになるのが目標です」というような、そういう示し方をします。現在まだ公表しておりませんが、いずれこれはホームページなどで、それぞれのメジャーごとに公表する予定です。

それから、授業配当をどうやって決めるか、というご質問がございました。この点についてはまだこれからなので、正直なところわからないのですけれ

ども、先ほどお話ししたような、設置予定のアカデミックプランニングセンターを通じて、なんとかうまくやっていきたいと思っております。また特定の教員に負担が集中する場合、その振り分けをどうするかという問題も当然生じてまいりますけれども、これもこれからの課題でございます。

なお時間割については、目下、教員間でそのバトルをしているところで、今日も時間割バトルの合間を縫ってこちらに来たという感じだったので。完全な時間割というのは当然ないのですけれども、大前提は、各メジャーの基礎科目がなるべく重ならないように提供されているということだと考えます。

最後に、深く考えて文章を書くことができない学生が増えてきたことへの対応についてのご質問があったかと思いますが、先ほどご紹介した米国リベラル教育学会というところは、特にリベラルアーツでは書く力を養成することが非常に重要であると強調しています。ですから、ここの認証を受けますときに、全学のすべての科目について、どのくらい学生に書かせるような課題を課しているかということは調査をいたしました。ちなみに、書かせる課題といっても、例えばなにか読み物でも講義でもいいのですけれども、一定の視点を与えられて、それに対して自分の意見を書くというような、そういうタイプの課題もあれば、もっと違ったタイプの課題もあります。米国リベラル教育学会の認証基準では、なるべくいろいろなタイプの課題を、それぞれのコースのなかで一定量必ず課すように要求されました。

そうしますと、書くことに慣れていない学生はいいのですけれども、まったく慣れていない学生もいますので、これはまだ構想段階なのですけれども、ライティングセンターのようなものをぜひ設置したいと考えています。授業のなかで書く訓練をすることはもちろんですが、それについていろいろな助けが得られるようなところにしたい。さらに、これは、実はライティングと言ってしまうと、多分に20世紀的な言い方になってしまいますけれども、今後必要な力は書く力だけではありません。リテラシーとよく言われますけれども、Critical Literacy Centerというような、なんでも英語で名前を付けて申しわけないのですが、そういう組織もつくって学生のトータルな力を伸ばしていきたいと考えております。ちょっと時間もあまりございませんので、これでいったん終えます。

中身からではなく外枠から変えていく

菊地 ありがとうございます。予定時間を少し過ぎておりますが、続いて濱口先生、よろしく願いいたします。

濱口 たぶん私に対する質問はそれほど多くは無かったようですので、簡単にお答えします。

まず一つのご質問は、今回の改革の何かモデルはあるのかということだったと思います。われわれがやっていることについては、たぶんよく言われることは、筑波大学では失敗したのではないかと。それと同じように

やるのか？というご批判は、よく受けます。われわれとしては、正確に筑波大学のモデルを検証してもいませんし、実は、何らかのモデルのもとにやったというよりは、ある意味ではやらざるをえないということをやっていたらこうなったという感じです。つまり、教育研究院そのものの制度自体はざいぶん前に提唱されて、それはもろもろの問題、人事管理の問題だとか、定員感覚の硬直化した部分であるとかをなんとか打破するというようなことを意図して始まったのですが、それを教育改革に活用しようという試みが、今われわれがやっていることだろうと思います。

それから、かなり観念的な話をしていることは事実です。今の新潟大学の教員が、各先生方が自分は何に属していると感じているかと言えば、多くの先生はやはり理学部の教授ないし法学部の教授という名刺を持って仕事をしており、今のところ古い制度の残渣を引きずりながらやっている状況です。つまり外枠が変わって、中身は正直それほど変わっていない。しかし、その変わっていない間に外枠を固めて、ふと気が付いたら新しい形になっていたというようにやりたいと、実は思っております。

それで、その上で、たぶん一番難しいのは、先生方が従来の学科という感覚ではなくて学生さんの面倒をきちんと見る、それをいかに制度化するかと



濱口 哲氏

いうことです。アドバイザー制なり、オフィスアワーなりということですが、その辺のシステムをどのようにつくるかということと、逆にそれを、そういうことのパフォーマンスをどのように評価して、人事配当その他に反映するかというようなシステムをどのように入れ込むかというのが、たぶん今後の問題かなと思っています。

シラバスにラーニング・ゴールを明記

菊地 ありがとうございます。大変熱心に語っていただき、すでに予定時間を15分少々過ぎてしまっているのですが、会場からのご質問がございましたらお受けいたしたいと思います。はいどうぞ。マイクを使っていただけますでしょうか。

質問1 たいへんありがとうございます。一つだけ、濱口先生に細かいことですが、何がしたいのは、科目の「公共性」という言葉をお使いになっておられますね。これは何でしょう。先ほど、だいたいわかったような気がします。二番目に、公共性の物差しというのがありますか。それから、だれが判断しますか。これは公共的なものである、いや公共性はないというのはだれが。そのことを。細かいことですが、すけれども。

菊地 濱口先生、お願いいたします。

濱口 たいへん難しいお話だろうと思います。それで、例えばですが、分析化学という授業がある。それは新潟大学の場合では、農学部にもあれば、工学部にもあれば、理学部でも開講している。それで、各先生方に言わせると、同じ講義名だけれど、それぞれ違うものであるとおっしゃいます。工学部で開講されている分析化学は、工学部の先生は、理学部のものとは違うのだとおっしゃる。農学部の先生も、「いや、農学部の場合は、そんな高度なものでなくて」とおっしゃるわけです。にもかかわらず、例えば農学部だと専門から遠いので、難しいので、水準をつけると5などというものがついてくる。内容は簡単なだけけれども5だよというようなことをおっしゃるわけです。

そのへんのことを、やはり調整していく必要があります。今はまだ、とてもとても完全にできあがっているということではないのですが、ひとつわれわれが考えていることは、シラバスの書き方を、ラーニング・ゴールという

かたちできちんと箇条書きで、学生が主語でということ徹底していきたくて、それをもとに水準をつけることが可能になれば、いろいろなことが少し整理をつけいくことができるかなと思っています。

これは、プログラムとしてのラーニング・ゴールの問題と、

授業科目としてのラーニング・ゴールの問題、その両者がうまく運用できればたぶん解決できる。ただ運用できる保証というのは、今のところないのですが、そういうようなことを考えているということです。



パネルディスカッション風景

必要なところへ必要なポストを充てる

菊地 ありがとうございます。では、もうひとかた、はいどうぞ。時間がございませんので手短にお願いいたします。

質問2 私は立教大学理学部の教員です。どうも今日はいろいろと、ご意見、コメント等、たいへん興味深くうかがわせていただきました。関西大学の芝井先生にお聞きしたいのですけれども、ちょっと私の不勉強で、インターディパートメントという言葉がわからなかった部分があるのですけれども、インターディパートメントという言葉のご説明と、そのインターディパートメントというのが、どのように活用されているのかという点について、できれば詳しくお聞きしたいという、実際どのようにされているのかというのをお聞きしたいということ。

あと、新専修の立ち上げについてご回答されたと思うのですが、その際に、テーマ・プロジェクトというのをまず考えて、それから新専修へ昇格というようなご回答だったかと思いますが、そのようにしていくと、新専修というのがどんどん増えていくなってしまうと、その新専修をどんどん立ち上げるにあたって、人的資源が投入されることになると、資金面でも問題が発生するのではないかと思ったりするわけですが、その点は大学としてはどのように判断されているのかというのをうかがいたいと思います。

菊地 芝井先生、お願いいたします。

芝井 すみません、詳しくということですが、時間も限られているので、なるべくうまくしゃべりたいと思います。最初にできましたインターディパートメントというのは、3年生からそこへ移りうる組織というかたちで、従来の学科の外側にでき

ました。まだ学科の時代ですので、これを学部内の「複線教育」という理屈を立てまして、そんなにいい理屈ではないかもわかりませんが、複線教育、つまり大学入学後の選択を認めると。ただ単なる転学科ではなくて、やはり今までなかったものを文学部で担保したいというのがありまして、まさに内容表示がなく、「インターディパートメント」という名前でした。

そこには、基本的には学際的なもの、それから従前の文学部の教育になかったものを入れるということにしたのです。指導の問題があってややこしいのですけれども、一つは「エリアスタディーズ」です。個別の言語にとらわれずに、地域研究の、あまり本格的なことはできないけれども、やる部分。私もそれを担当しておりましたけれども、それをつくりましょうと。もう一つ、「人文情報」です。人文科学系の情報教育をそこでして、人文科学分野を情報の技術をもって卒業研究、卒業論文まで高めるという、これは、指導はなかなか難しいのですが。それからもう一つが「ヒューマンサイエンス」という、これもなかなかややこしいのですけれども、一種のアクションリサーチと考えていただいていいと思います。アクションリサーチを意識したかたちの、教育や福祉の現場へ直接学生と一緒に出ていって、そこで現代的な課題を発見して、そして解決に向けて一種のプランニングをしていこうという、そういうタイプの研究なのですが。この三つを、そこに放り込みました。たくさんの方が来ました。当時3年生を抜かれた学科は、「おれのところの学生を抜きやがって」とかなり怒ったわけです。そういう形で運用しまし



パネルディスカッション風景

ただ、1学科多専修になったときに、インターディパートメントも最初からプログラムにすべきであるという話になって、2年次に専修分属をする一つの専修扱いの組織になりました。今後どうするのか少し微妙なのですが、従前の文学部の持っていた教育カリキュラムの中に、あまりうまく入らないようなタイプの研究や教育の芽、そういったものが、そこからまた新たに生まれてくる可能性があるもの、そのように考えています。

それからもう一つは、どんどん分かれていくと、お金とか資源とかどうなるのかということなのですが、先ほど人事のところでも申しあげましたように、既存の大きな枠の人間の数は変わっておりませんで、定年退職後のポストが文学部の中心に集められて、その配分について厳しい議論をしながらポストを充てているということです。つまり、最も必要なところへ必要なポストを充てるような方法でやりましょうと。そのなかで生き残ったところが、新専修を立てる。だいたいそういうことをしています。毎回、やたら長い会議をして原案を決めて、やたら長い教授会をして、それ以外に、教授会以外に公聴、ヒアリングの機会を持って、学部長と教授会で選ばれた委員、今6人だと思いますが、6人が決めた案について説明をして合意するという、そういうシステムです。

菊地 ありがとうございます。まだ質問をなさりたい方が多数いらっしゃると思いますが、さすがにこれ以上終了時間を引き延ばすということはできないと思いますので、引き続きご質問につきましては、大学教育開発・支援センターのほうに寄せていただき、三人の先生にまたお問い合わせさせていただくということにさせていただきたいと思います。

特に私のほうでまとめということではできませんが、三人の先生方のお話で共通していたのは、これまでの学問分野と教育のプログラムづくりとは多少分けて考えていかなければならないという点であったのではないかと思います。その際に、激論を恐れないでやっておられる、ここがやはりすごいなあと思う次第です。それから、教育プログラムの改革は、教員組織のあり方の再検討とセットになってくるものであるということも共通していたのではないかと思います。今後の参考にさせていただきます。

本日は長時間に渡り活発にご議論いただきました。芝井先生、日比谷先生、濱口先生、お忙しいところ貴重なお話を聞かせていただきまして、どうもあ

ありがとうございました。

(終了)

芝井敬司氏 レジюме

【資料1-1】

学ぶ姿勢を醸成する教育——初年次教育、学校インターンシップ、カレッジリンク

2006年12月11日 立教大学
関西大学 芝井 敬司

<はじめに>

* 関西大学文学部の継続的改革

「多彩なディシプリンと活発なプロジェクトによる新しい人文学の拠点形成」

* 2002年10月から2006年9月までの4年間

- 第一期 ①学部組織の改革 ②採用人事の改革 ③大学と社会との連携
第二期 ①教育改革の継続 ②社会連携の推進 ③研究の展開

1 初年次教育

- 1) 8学科制から総合人文学科1学科10専修制への移行
- 2) 学部一括入学2年次専修分属制度への移行
- 3) 1年次学部共通専門科目の新設
「学びの扉」(入門講義型)
「知へのパスポート」(入門演習型)
「知のナビゲーター」(フレッシュマンセミナー型) 8クラス⇒16クラス
- 4) 「知のナビゲーター」——共通シラバス、担当者連絡会議

2 学校インターンシップ (2005年度特色 GP 採択)

- 1) 高大連携事業としての出発 (2003年)
- 2) 小中高への展開 (2004年)
- 3) 学生の社会的成熟——大学生の自覚を促す学外教育プログラム

3 カリキュラムの自由設計 (2006年)

- 1) 専門科目の必修科目の大幅なスリム化
- 2) 「モデルカリキュラム」と「ガイダンスの強化」
- 3) カリキュラムの「体系」からカリキュラムの「設計」へ

<おわりに>

*カレッジリンク型シニア住宅創設事業——異年齢集団の交流 (2007年、2008年)

*スペシャリストプログラム——「学部3年+大学院2年」の5年一貫コース (2007年)

*1学科18専修制への発展——「英米文化」「芸術学美術史」「心理学」「映像文化」
「文化共生学」「地理学・地域環境学」「比較宗教学」「初等教育学」

【資料1ー2】:「知のナビゲーター」シラバス



■担任者名 中澤 務

■講義概要

【「知のナビゲーター」の目的】〈全クラス共通〉

文学部のどの専修に進むにしても、大学生として学んでいくためには、いくつかの基礎技能を身につけておくことが必要である。この「知のナビゲーター」の目的は、特定の専修に進むために必要な知識の習得ではなく、大学生として学ぶためのスタディー・スキルの育成にある。それは具体的には次のようなものである。

- (1) 資料のポイントをつかむ: 文献・資料を的確に読む能力。
- (2) レジューメ・サマリーを作る: 文献・資料の内容をまとめた文章を作成する能力。
- (3) レポート・論文を書く: テーマに応じて、自分自身の見解をまとめた文章を作成する能力。
- (4) プレゼンテーション: 調査した内容や自己の見解を口頭で発表する能力。
- (5) ディスカッション: 発表内容を的確に聞き取り、質疑、議論する能力。
- (6) モティベーションを高める: 人文学の研究への動機づけやテーマ発見。
- (7) 図書館・コンピュータの利用技術: その他、大学での学習に必要な技術の習得。

これらのうち、どのスキルを重点的に扱うかはクラスによって異なるので、下記の「このクラスの概要」と「講義計画」を参照すること。

【このクラスの概要】

このクラスでは、(1)資料のポイントをつかむ、(2)レジューメ・サマリーを作る、(3)レポート・論文を書く、(4)プレゼンテーション、(5)ディスカッションなどのスキルを重点的に扱う。これらのスキルの育成のために、このクラスでは、“問題を論理的・批判的に考察して、説得的な意見を作り出す技術”(「ロジカル・シンキング」)、「クリティカル・シンキング」)の訓練を中心に授業を進めたい。授業では、「講義計画」にある様々な方法を駆使して、この技術を総合的に習得していく。

■講義計画

「講義概要」で説明した知的能力を養うために、以下のようなかたちで授業を進めていく予定である。

I 論理的思考の基礎を身につける

論理的・批判的に考えるために必要な基礎知識を学ぶ。

II 議論を読み解き、批判する訓練

新聞の社説などを教材にして、議論を読み解く訓練を行う。
また、論理の弱点を発見して批判する訓練も行う。

III 説得的な議論を構築する訓練

説得的な議論を作り出すためにはどうすればよいかを学ぶ。また、これと平行して、レポートの作成方法(テーマの見付け方、資料調査の方法、議論のまとめ方、原稿の書き方など)を学ぶ。

IV プレゼンテーションと応答能力の育成

自分の意見を説得的にプレゼンテーションする力と、質問や批判に対して的確に応答できる能力を育成する。

V ディベート

最終的な仕上げとしてディベートを行なう。ディベートは上述の知的技能すべてを使う知的競技だからである。準備から対戦までの一連の作業を経験することで、知的スキルの総合的な向上を目指す。

※その他、合宿(自由参加)や図書館ガイダンスを行なう予定です。

【資料 1 - 3】

「知のナビゲーター」に関するアンケート結果（2005 年 7 月実施）

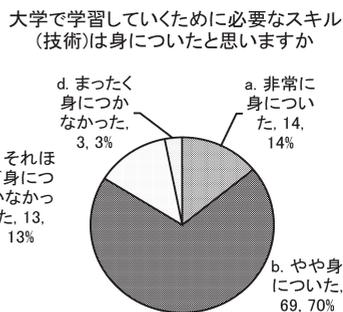
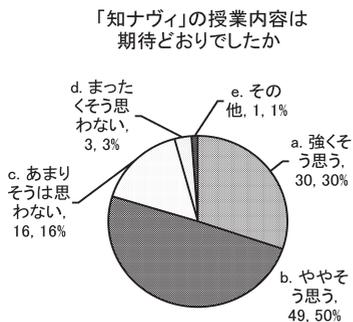
1 年次		2 年次	合計
受講者	未受講者	受講者	
100	153	38	291

(回収率 26.6%)

■大学入学時の不安【抜粋】

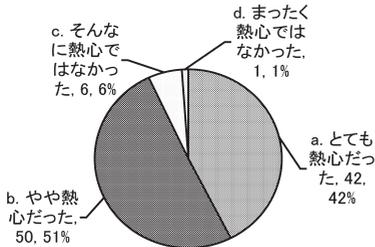
- ★勉強についていけるか。高校までとは違い、覚えるだけでなく自分で考え出さなければいけないことに不安だった。
- ★90 分というひとコマ当たりの授業の長さ、テストの形式など。
- ★高校の時とは全く違う授業科目ばかりだったので、どんな風なのか、またついていけるかどうか不安がありました。
- ★履修のやりかたがよくわからなかった。何を何単位以上とらなければならないかなど。
- ★レポートの課題がたくさん出されると思っていたので、書き方などがわからないため不安でした。
- ★テストの形態が高校と違うことに対して。入学後、レポートの書き方を習うことなくレポートが出て焦りました。
- ★どんな試験なのか。論文レポートなどはどう書けばよいのか。
- ★発表などちゃんとできるか。
- ★大学の先生は板書を丁寧にしないと聞いていたので、ノートを上手に取れるか。

■満足度、スキルの向上（2005 年度受講生）

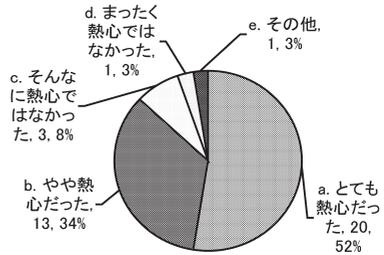


■ 熱心さ

質問11. あなたは熱心に「知ナビ」の授業に取り組みましたか

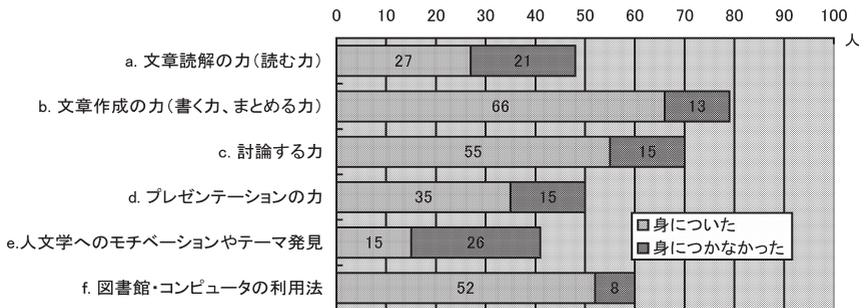


質問11. あなたは熱心に「知ナビ」の授業に取り組みましたか



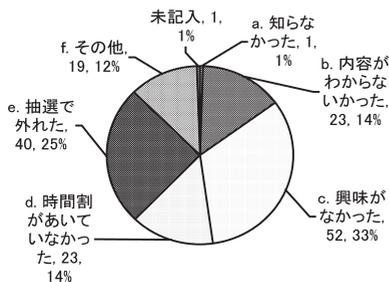
■ 身についたスキル・身につかなかったスキル

(2005年度生)

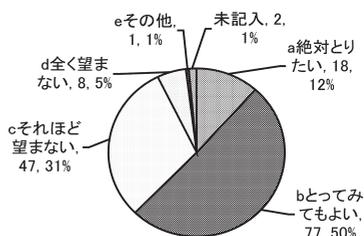


■なぜ、「知のナビゲーター」を受講しなかったか？

なぜ履修しなかったのですか

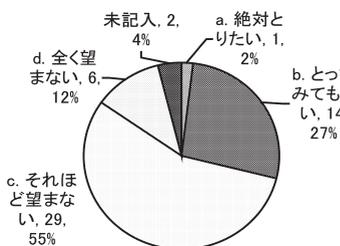


今後「知ナビ」と同様の授業を履修する機会があれば、とってみたいですか

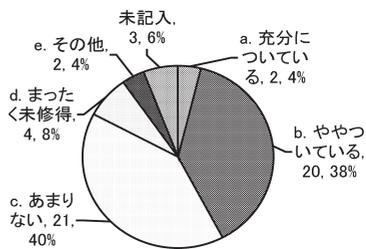


「興味がなかった」と答えた者のうち・・・

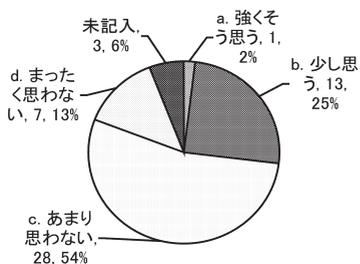
今後「知ナビ」と同様の授業を履修する機会があれば、とってみたいですか



「知ナビ」の授業を履修してなくても、「知ナビ」で習うスキル(技術)を身につけていると思いますか



「知ナビ」の授業を履修しておけばよかったと思いますか



立教大学 大学教育開発・支援センター主催シンポジウム
「わが大学・わが学部の教育改革を語る」
－ 学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム －

日比谷潤子氏 レジュメ

資料2

ICUの教学改革

国際基督教大学
日比谷 潤子

ICUの教育

①

1953年 開学

- ・教養学部一学部制
- ・国内唯一の本格的リベラルアーツ型大学
- ・懇切丁寧な学習支援
- ・日英語を公用語とするバイリンガリズム
- ・柔軟な履修構造(学問分野間の境界を超えた知識の探求)

1997年、2001年、2004年

ベネッセ教育総研「全国大学満足度調査」
総合満足度第1位

2003年 文科省「特色ある大学教育支援プログラム」
「責任ある地球市民を育むリベラルアーツ」

2005年 米国リベラル教育学会のプログラム認証

②

ICUの改革

- ・外的要因
- ・内的要因
- ・目標 次代を担う若者に21世紀の挑戦
に立ち向かう力を与え続ける

③

改革の趣旨

- ・6学科から30を超えるメジャーへ
- ・ダブルメジャー、メジャー・マイナー制度

④

濱口哲氏 レジюме

【資料3-1】

**新学士課程教育の確立を目指して
――科目区分の撤廃・主専攻と副専攻・全学教育機構――**

新潟大学副学長(学務担当)：大学教育開発研究センター長
濱口 哲

所属：教育研究院 自然科学系 環境共生科学系列
担当：理学部 自然環境科学科
大学院 自然科学研究科

1. 新潟大学の教育目標と新学士課程教育

- ・ 高等教育を取り巻く環境の変化、
学生の量的、質的变化
高等教育改革の動向
- ・ 新潟大学の理念目標と教育改革
「精選された教育課程を通じて、豊かな教養と高い専門知識を修得し、時代の課題
に的確に対応し、広範に活躍する人材を育成すること」
- ・ 設置基準大綱化以降の新潟大学における教育改革とその評価
→ → 新学士課程教育システム構築へ
- ・ 新学士課程教育システム構築のための具体的な改革点
 - 1) 教員所属組織の変更
 - 2) 授業開設体制の変更と全学教育機構の設置
 - 3) 科目区分の撤廃と分野・水準表示法
 - 4) 副専攻制度の導入
 - 5) 主専攻プログラム化へ

2. 授業科目開設体制の変更

- ・ 教育研究院の設置
教育組織と人事単位の分離
一元的な人事管理体制の構築（定員概念から人件費管理へ）
教育研究を主任務としない"教員"
- ・ 教員の3つの仕事
 - 1) 授業を全学に向けて開講する。
 - 2) 担当する教育単位に関わる教育プログラムの構築と運営
 - 3) 担当する(教育単位の)学生集団の学生に対する指導
- ・ 教育に関わる任務分掌（教育組織・全学教育機構・教育研究院）
 - 教育組織：学部（学科・課程）
教育プログラムの構築・運営・改善／必要な授業科目の開設を機構に要請
学生の履修・厚生・キャリア形成などの指導

○教育研究院

授業担当者の決定と派遣／学部・学科など教育プログラム担当教員の派遣

○全学教育機構

開設授業科目(分野・水準表示付)の決定／担当者の派遣を教育研究院に要請
担当者・曜限を含めた開設授業科目の公示

3. 科目区分の撤廃と分野・水準表示法

教養科目と専門科目の科目区分の撤廃（教養／専門は科目の属性としない）

全授業科目に分野と水準を示すコードを付ける。

- ① 学生に、授業科目の学問分野と水準を示す
- ② 担当教員に授業科目の“公共性”の確保を要請する

- ・分野コードは教育プログラムに準拠するものではない。
- ・水準はプログラムの中での位置付けではない。

4. 副専攻制度

主専攻に加えて、なにかしかの分野において纏まった勉学をした学生を認定する。

副専攻として必要な単位数および要件の設定

主・副合計の取得単位数

一定以上の成績の学生に限る。

5. 主専攻プログラムの再構築へ

"分野に準拠した教育"から"到達目標に準拠した人材養成"へ

大学院教育と学士課程教育の接続(仕分け)を考慮

資料3-2

新潟大学の新学士課程教育システム —分野・水準表示法と副専攻制度—

新潟大学 副学長（学務担当）

全学教育機構 副機構長
大学教育開発研究センター長

濱 口 哲

所属：教育研究院 自然科学系
担当：理学部 自然環境科学科
自然科学研究科 環境共生科学専攻

①



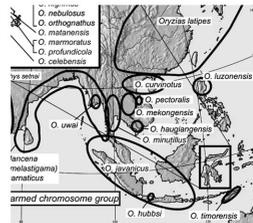
大江山メダカとり

高橋五仙子 画集（新潟日報）

②



メダカ性決定/性分化制御機構の解明



③

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム



④

学生・社会の変化Ⅱ：質的变化

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム



教養概念

幅広い知識 : 術学的
敢えて非専門の知識をひけらかす
受験勉強だけをしていないふりをする受験生

「青春期の若者の収容施設」としての大学
(リベラルアーツカレッジ)

「学生を適切に社会に配分する教育制度」
としての大学
(パイプラインシステム)

1980年：教養の崩壊、青春(青年)の死
“青年”の収容施設としての大学は？

⑦

学生・社会の変化Ⅲ：高等教育の学習観

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム



〈高等教育〉

「何を教えるか？」

→→ 「如何に学習を深めるか？」

知識体系中心の伝授

→→ 個々の文脈や目的によって再構成
され、創造される知識

3文字学部 → 4文字学部 → 6文字超学部

学問分野を基盤とした学部学科

→→ 学習到達目標を達成するための
教育プログラム

⑧

新潟大学の概要

平成18年12月11日
立教文庫システム5.0

理学部
工学部
農学部

人文学部
教育人間科学部
法学部
経済学部

医学部
歯学部

自然科学研究科
現代社会文化研究科
教育学研究科
医歯学総合研究科

学部学生数 : 10,628人
大学院学生数 : 2,486人
教職員数 : 2,379人
(2006年5月1日現在)

⑨

新潟大学

新潟大学の理念・目標

新潟大学は高志の大地に育まれた
敬虔質実の伝統と世界に開かれた
海港都市の進取の精神に基づいて、
自立と創生を全学の理念とし、教育
と研究を通じて地域や世界の発展に
貢献することを全学の目的とする。

⑩

＜新潟大学の教育目標＞

- ・ 精選された教育課程を通じて、
- ・ 豊かな教養と高い専門知識を修得し
- ・ 時代の課題に的確に対応し、
広範に活躍する
人材を育成することに置く。
(中期目標・中期計画)

⑪

時代の課題に的確に対応して広範 に活躍する人材

- ・ 時代：21世紀は「知識基盤社会」：中教審答申(2005)
 知識のグローバル化
 知識は日進月歩、絶え間のない競争と技術革新
 パラダイムの転換を伴う知識の進展
 幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断の重要性
 性別や年齢を問わない参画の促進
「生涯学習社会」
- ・ 広範に活躍する人材
 生涯学習する能力を身につけた人材
 「自立した創造的学習者」
←→「自立と創生」 全学の理念

⑫



豊かな教養と 高い専門知識を修得

広さ (width) と深さ (depth) のある学習を行う
(旧来イメージの教養と専門ではないのではない)

○広さ (width)

総合大学の全能力を活用した学習の可能性

新潟大学で開設されている全授業科目を
活用可能に →→ 分野・水準表示法
(副専攻)

○深さ (depth)

主専攻と副専攻

⑬



精選された教育課程の構築

- ・ 開設授業科目の精選 >>> 単位の質保証
授業内容の”公共性”の確保
→→ シラバスの改善
「到達目標←→評価基準・方法」
→→ 授業科目の分野・水準表示
- ・ 教育プログラムの精選 >>> 学位の質保証
教育プログラムの達成目標を明示
→→ “コース”シラバスの整備

⑭

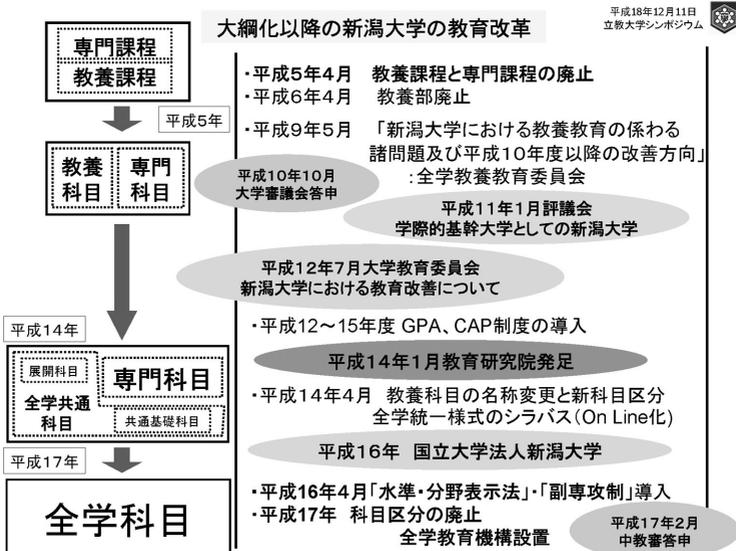
＜新潟大学の教育目標＞

- ・ 精選された教育課程を通じて、
- ・ 豊かな教養と高い専門知識を修得し
- ・ 時代の課題に的確に対応し、
広範に活躍する
人材を育成することに置く。
(中期目標・中期計画)



新学士課程教育システム

⑮



⑯

大綱化以降10年の大学教育 「専門課程」+「脆弱化した教養課程」

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム 

大綱化/教養部廃止以降: 全学出動体制による教養科目

「委員会→→部門・学類」体制

→→ 脆弱化した仮想的教養部

教養科目の枠組みの改善は可能、
しかし、教養科目の”中身”の改善は進まない。

専門課程は相変わらずの専門課程



授業科目の内容の担保

専門教育を含めた4年一貫教育プログラム化

新学士課程教育システムの構築へ

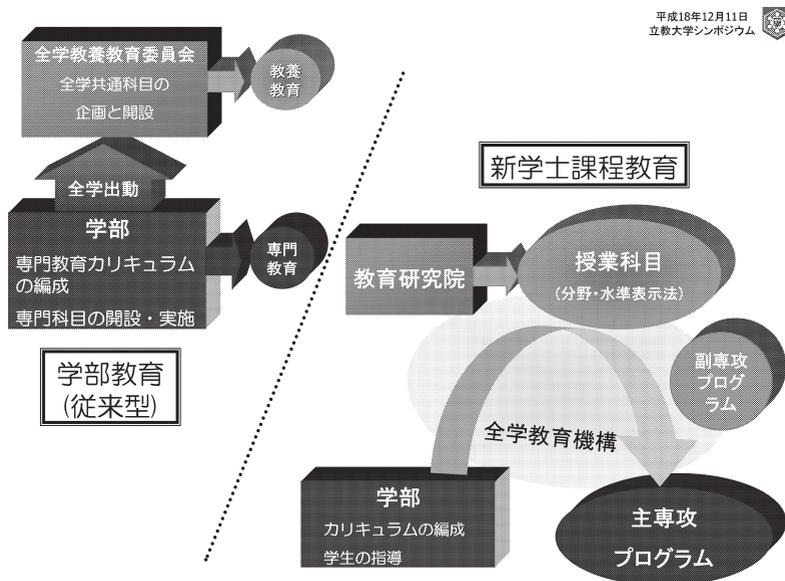
⑰

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム 

新学士課程教育システムの概要

- 教員所属組織の変更
- 授業開設体制の変更と全学教育機構の設置
- 科目区分の撤廃と分野・水準表示法
- 副専攻制度
- 主専攻プログラムの構築へ

⑱

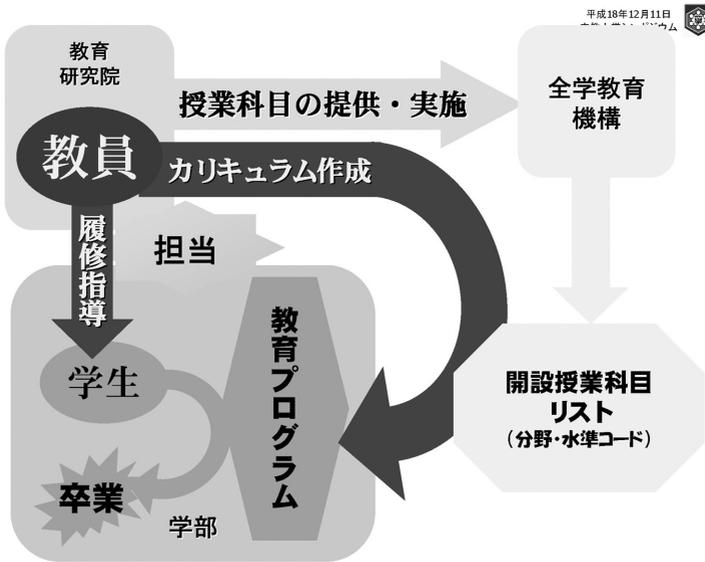


19

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム

1. 教育目標と新学士課程教育
2. 授業科目開設体制の変更
教員の所属組織の変更
全学教育機構
3. 科目区分の撤廃と
分野・水準表示法
4. 副専攻制度の設置
5. 主専攻プログラムの再構築へ

20



②3

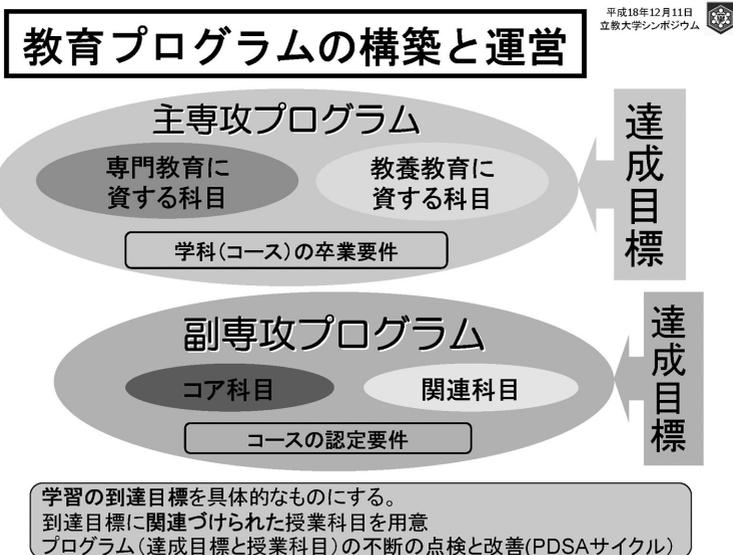
平成18年12月11日
立教大学シンポジウム

授業科目担当

- 授業は原則として全学的位置付けを持つ。
(特定の教育プログラムだけのものではない。)
シラバスなどによる内容の公開性の確保が重要
- 分野・水準コードにしたがった内実を担保
授業での「学習の到達目標」が基盤
達成目標 → 分野ごとに開講授業の体系的性
→ 評価基準／方法の妥当性

履修要件(requirement)の実質的運用

②4



25

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム 

学生指導

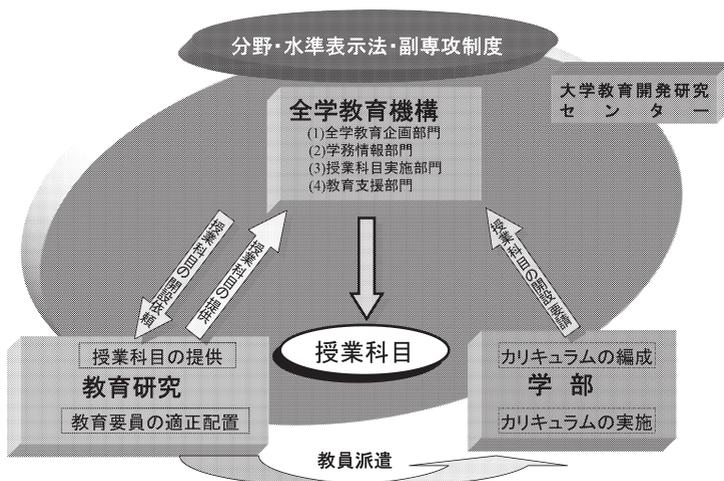
- 学生の履修面・厚生面での支援
- アドバイザー制／オフィスアワー
- 大学学習法（スタディースキルズ）
- 個々の教員の個人的な活動ではなく、目標を共有する教員集団としての取り組みが重要
→→ 機能的教員集団の形成が重要
(Faculty Development)

26

- **教育組織：学部（学科・課程）**
教育プログラムの構築・運営・改善
必要な授業科目の開設を機構に要請
学生の履修・厚生・キャリア形成などの指導
- **全学教育機構**
開設授業科目（分野・水準表示付）の決定
担当者の派遣を教育研究院に要請
担当者・曜限を含めた開設授業科目の公示
- **教育研究院**
授業担当者の決定と派遣
学部・学科など教育プログラム担当教員の派遣

②7

新学士課程教育システムの概念図



②8

1. 教育目標と新学士課程教育
2. 授業科目開設体制の変更
教員の所属組織の変更
全学教育機構
3. 科目区分の撤廃と
分野・水準表示法
4. 副専攻制度の設置
5. 主専攻プログラムの再構築へ

29

科目区分の撤廃

教養科目と専門科目の区分の撤廃

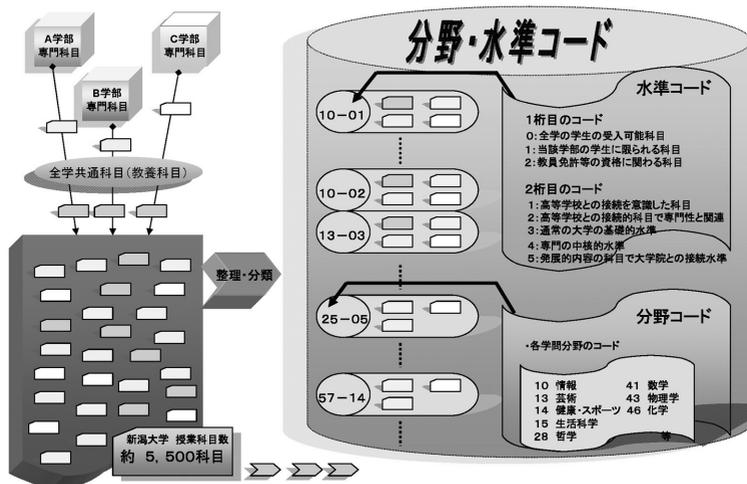
「教養 vs 専門」の不毛な？議論からの脱出
プログラムの二元性を打破する。

- プログラムの全授業科目をその到達目標に対してカスタマイズ出来るか？
- ”学の祭壇”の前で正当性が担保された授業科目でプログラムを構築するか？
分野・水準表示

30

分野・水準表示法

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム



①

分野・水準表示法

平成18年12月11日
立教大学シンポジウム

授業科目毎に分野と水準を示すコードを設定する。

- ① 学生に、授業科目の学問分野と水準を示す
- ② 担当教員に授業科目の”公共性”の確保を要請する

☆ 分野は学問分野の区分

教育プログラムに即したものではない

☆ 水準：内容の積み重ね

大学レベルの授業：3 / 4 / 5 の3段階

分野・水準 →→→ 授業科目の達成目標

内容方法は或る程度の個々の担当者の工夫

②

●分野コード表

分 野	分 野
10 情報	48 工学基礎
13 芸術	50 機械工学
14 健康スポーツ	51 電気電子工学
15 生活科学	52 土木工学
16 科学社会学	53 建築学
26 哲学	54 材料工学
29 文学	55 プロセス工学
30 言語学	56 人間工学
31 史学	57 生物学
32 人文地理学	60 農学
33 文化人類学・民俗学	61 農芸化学
34 法学	62 林学
35 政治学	64 農業経済
36 経済学	65 農業工学
37 経営学	68 畜産学
38 社会学	70 英語
39 心理学	71 外国語
40 教育学	75 新潟大学個性化科目
41 数学	76 大学学習法
43 物理学	77 課題研究
44 地学	80 医科学
46 化学	90 歯科学
47 応用化学	98 その他

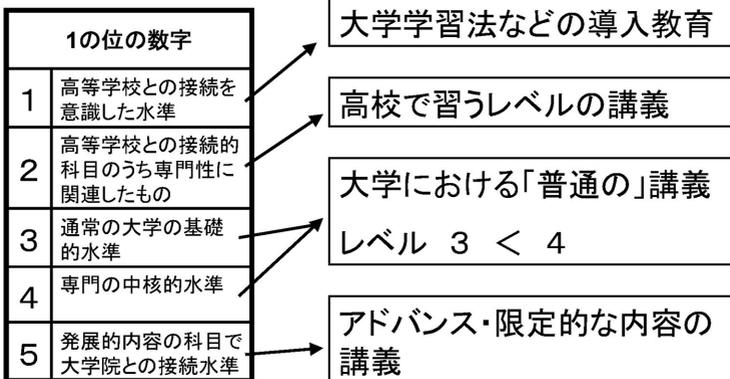
●水準コード表

10の位の数字	
0	全学の学生を受け入れることが可能な科目
1	当該学部（学科）の学生に限られる科目
2	教員免許など資格に関わる科目

1の位の数字	
1	高等学校との接続を意識した水準
2	高等学校との接続の科目のうち専門性に関連したもの
3	通常の大学の基礎的水準
4	専門の中核的水準
5	発展的内容の科目で大学院との接続水準

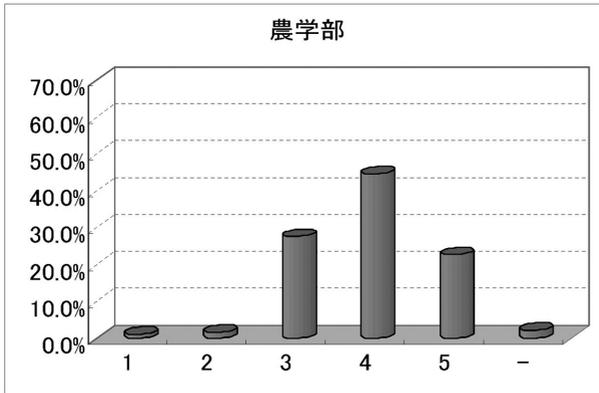
科学研究費の分野・分科
に準拠して調整
教育プログラム（学部
学科）には依らない。

水準（1の位）の意味

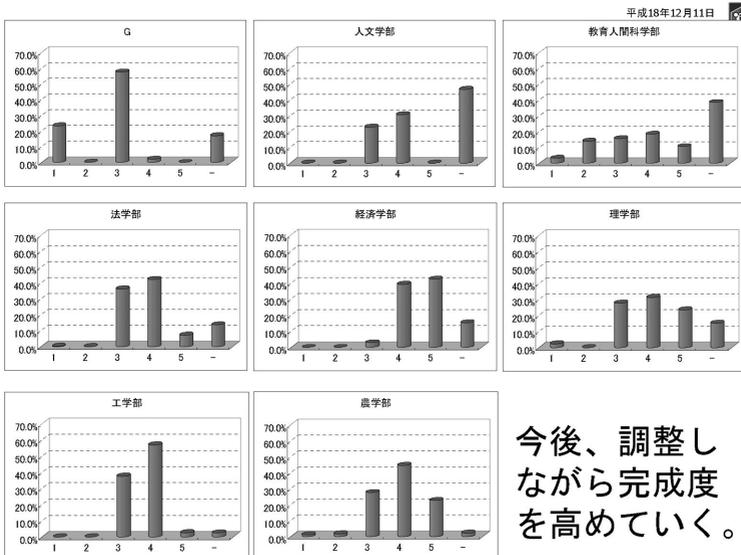




実例：科目数の水準別頻度（農学部）



35



36



水準コードと受講学年の関係 (平成17年度)

水準	G	人文	教育	法	経済	理	工	農	全体
3	1.67	2.00	2.78	2.87	1.90	1.85	2.27	2.41	2.08
4	2.98	3.32	2.96	3.41	2.42	2.76	2.72	2.87	2.93
5	-	-	3.54	3.44	3.01	3.74	4.00	3.20	3.38

③7

複数条件を指定した場合は、AND検索となります。



科目情報検索 (Subject Information Search)

年度 (Year)	2006年度	*リストから指定してください
フォルダ (Folder Name)	▼選択してください <input type="checkbox"/> サブフォルダを含む	*リストから指定してください
開講番号 (Time Table Number)		*中間一致検索
科目名 (Subject Name)		*中間一致検索
担当教員名 (Teaching Staff Name)		*中間一致検索
開講学期 (Course time)	▼選択してください	曜日・時限 (day-hour) ▼選択してください ▼選択してください
分野 (Sphere)	生物学	水準 (Standard) ▼選択してください
副専攻 (Sub Specialize)	▼選択してください	資格 (License) ▼選択してください
担当部局 (Charge of Department)	▼選択してください	使用言語 (Language) ▼選択してください

主専攻対象 (Admission Search)

学部 / 研究科 (Faculty)	▼選択してください	*リストから指定してください
学科 / 専攻 (Department)	▼選択してください	*リストから指定してください
学年 (Grade)	▼選択してください	*中間一致検索

全文検索 (Free Word Search)

フリーワード (Free Word) *検索語をスペースで区切って指定してください (30まで)



③8

年度	科目名	科目コード	科目名	担当教員	対象学年	開講番号	開講学期	曜日・時限	履修状態
2006年度	農学	0A22A003	植物遺伝学	【教】E 福山 利晴		060A1124	第2学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A22A014	遺伝学	【教】E 岡崎 桂一		060A1125	第1学期	金1	履修済
2006年度	農学	0A22A015	基礎動物遺伝学	【教】E 坂前 博明		060A1134	第1学期	木1	履修済
2006年度	農学	0A23A060	動物遺伝学	【教】E 坂前 博明		060A1135	第1学期	木1	履修済
2006年度	農学	0A23A011	植物分子生物学	【教】E 岡崎 桂一		060A1170	第2学期	金2	履修済
2006年度	農学	0A23A026	染色体工学	【教】E 岡崎 桂一		060A1171	第2学期	金2	履修済
2006年度	農学	0A23A062	動物発生学	【教】E 新村 未雄		060A1174	第1学期	月2	履修済
2006年度	農学	0A21B077	生物化学Ⅰ	【教】E 三ツ井敏明		060A2009	第1学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A21B079	生物化学Ⅱ	【教】E 三ツ井敏明		060A2010	第2学期	木1	履修済
2006年度	農学	0A22B101	分子雑生物学	【教】E 仲川 洋治		060A2102	第1学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A22B025	分子生物学	【教】E 仲川 洋治		060A2103	第1学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A22B082	植物生理学	【教】E 末吉 邦		060A2114	第1学期	火1	履修済
2006年度	農学	0A21CA16	生産環境科学概論Ⅱ	【教】E 権田 豊		060A3003	第1学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A21CA05	森林管理科学概論	【教】E 権田 豊		060A3004	第1学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A22CA05	保全生態学	【教】E 箕口 秀夫		060A3304	第2学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A23CA01	生物圏ネットワーク論	【教】E 箕口 秀夫		060A3305	第2学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A22CA72	森林環境論	【教】E 中田 誠		060A3601	第1学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A23C118	森林環境論	【教】E 中田 誠		060A3602	第1学期	水3	履修済
2006年度	農学	0A22CA33	野生動物生態学	【教】E 橋本 智彦		060A3701	第1学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A23C117	樹木生態学	【教】E 橋本 智彦		060A3702	第1学期	木2	履修済
2006年度	農学	0A22CA34	野生動物生態学	【教】E 関島 恒夫		060A3703	第1学期	木3	履修済
2006年度	農学	0A23C030	森林生物保護学	【教】E 関島 恒夫		060A3704	第1学期	木3	履修済

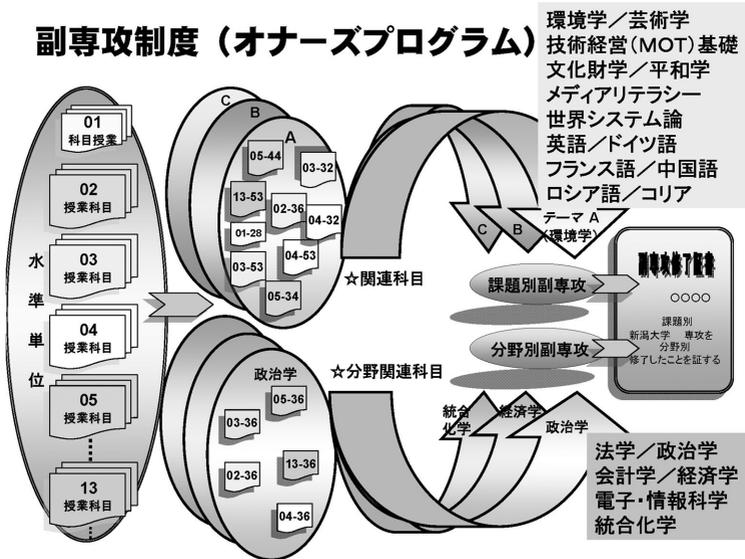
39

2006年度	教育人間科学	0K22U227	生物学実験Ⅱ	【教】E 福原 晴夫		060K7575	第2学期	火3火4	履修済
2006年度	教育人間科学	0K22U228	昆虫学実習	【教】E 福原 晴夫		060K7576	第2学期	集中	履修済
2006年度	教育人間科学	0K22U229	植物野外実習	【教】E 森田 龍義		060K7577	第2学期	集中	履修済
2006年度	教育人間科学	0K22U230	生活環境生物学セミナーB	【教】E 森田 龍義		060K7578	第2学期	水3水4	履修済
2006年度	教育人間科学	0K22U230	生活環境生物学セミナーB	【教】E 福原 晴夫		060K7579	第2学期	水3水4	履修済
2006年度	理学	05214006	基礎植物学	【教】E 菊山 宗弘		06054002	第2学期	火2	履修済
2006年度	理学	05224166	分子生物学	【教】E 杉本 健吉		06054003	第1学期	火2	履修済
2006年度	理学	05214007	基礎生物化学	【教】E 小谷 晶司		06054004	第1学期	月2	履修済
2006年度	理学	05224228	生物化学	【教】E 小谷 晶司		06054005	第2学期	月2	履修済
2006年度	理学	05224229	細胞生物学	【教】E 内海 利男		06054006	第1学期	水2	履修済
2006年度	理学	05224230	生体情報学	【教】E 内海 利男		06054007	第2学期	水2	履修済
2006年度	理学	05224168	免疫生物学	【教】E 緒野 正道		06054008	第1学期	火3	履修済
2006年度	理学	05224231	進化生物学Ⅰ	【教】E 大西 耕二		06054009	第1学期	月3	履修済
2006年度	理学	05224232	進化生物学Ⅱ	【教】E 大西 耕二		06054010	第1学期	木1	履修済
2006年度	理学	05224169	分子生物学実習	【教】E 新野 貴		06054011	第1学期	水3水4木3木4	履修済
2006年度	理学	05224170	生物化学実習	【教】E 小谷 晶司		06054012	第2学期	木3木4	履修済
2006年度	理学	05224171	動物遺伝制御学	【教】E 内海 利男		06054013	第2学期	火2	履修済
2006年度	理学	05224111	分子生物学	【教】E 内海 利男		06054014	第2学期	金2	履修済
2006年度	理学	05214008	基礎細胞生物学	【教】E 渡辺 勇一		06054015	第1学期	火2	履修済
2006年度	理学	05224173	動物の器官発生	【教】E 渡辺 勇一		06054016	第2学期	月4	履修済
2006年度	理学	05224240	動物形態発生学実習	【教】E 渡辺 勇一		06054017	第2学期	火3火4水3水4	履修済
2006年度	理学	05214010	基礎生物学実習Ⅰ	【教】E 新野 貴		06054018	第2学期	火3火4	履修済
2006年度	理学	05224176	発生のプログラム	【教】E 新野 貴		06054019	第2学期	金2	履修済
2006年度	理学	05214009	基礎細胞遺伝学	【教】E 和野 貴		06054020	第1学期	金1	履修済

40

1. 教育目標と新学士課程教育
2. 授業科目開設体制の変更
教員の所属組織の変更
全学教育機構
3. 科目区分の撤廃と
分野・水準表示法
4. 副専攻制度の設置
5. 主専攻プログラムの再構築へ

④



④

課題別

分野別

地域学
環境学
メディア・リテラシー
芸術学
文化財学
外国語(ドイツ語)
外国語(英語)
外国語(フランス語)
外国語(コリア)
外国語(ロシア語)
外国語(中国語)
世界システム論
平和学

法律学
政治学
経済学
会計学
電子・情報科学
統合化学

MOT基礎(特許・経営及び製品開発基礎コース)

合計
20 プログラム

認定
平成17年度 17名

④3

副専攻プログラム

- 副専攻委員会の設置
副専攻プログラムの構築・運営・改善
- 達成目標の明示
”計測可能な“到達基準(現状は発展途上?)
- 到達基準に則した授業科目リストの作成
コア科目と関連科目を区分する
入門科目・実習or演習科目を含む
- 認定条件の設定
24単位以上取得、主専攻関連科目の制限等
- 認定審査
学生の申請に基づいて審査

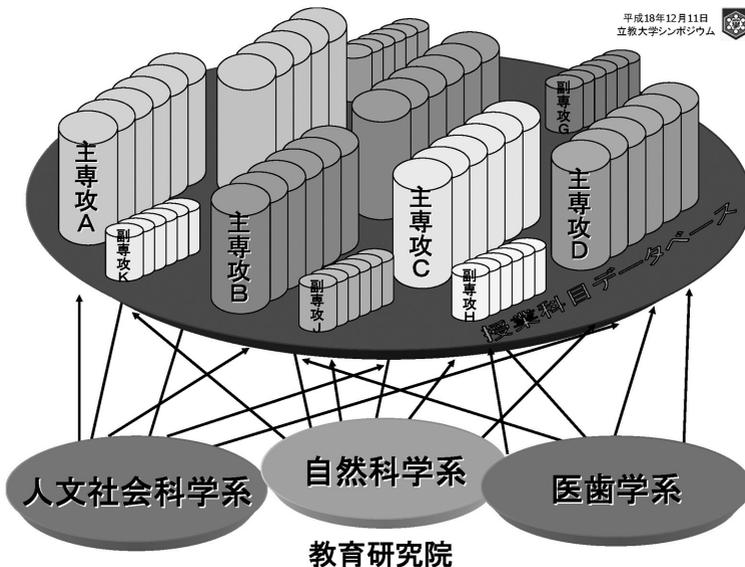
④4



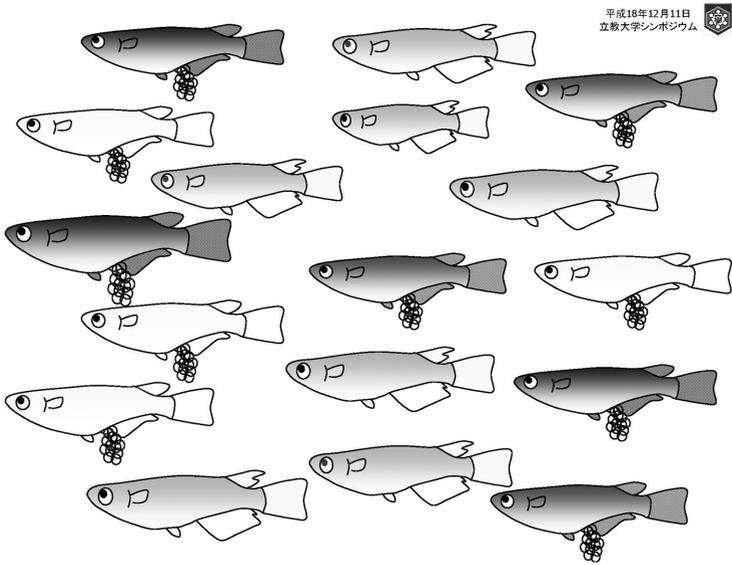
学部・学科・課程のカリキュラムから “主専攻プログラム”へ

- 従来の学科・課程・コース：学問分野を基盤
主専攻プログラム
：どのような資質の人材を養成するか：到達目標
- 計測可能な達成目標を明示
個々の到達基準に即した授業科目編成
授業科目の体系性の明示(分野・水準表示/履修要件)
- 既存の学科などを基礎に再編成したプログラム
＋ 新たな資質の人材育成プログラムの可能性

④7



④8



大学教育開発研究シリーズ No. 4
わが大学・わが学部の教育改革を語る
— 学生の学ぶ力、選ぶ力とカリキュラム —

2007年5月発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
TEL : 03-3985-4624 FAX : 03-3985-4615
[http : //www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe](http://www.rikkyo.ne.jp/grp/cdshe)
e-mail : cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

印刷 精文堂印刷株式会社
〒116-0012 東京都荒川区東尾久1-36-4
TEL : 03-3895-6211 FAX : 03-3892-1544
